



井内むかし話

昭和63年 井内地区の棚田風景

「井内むかし話」発刊によせて

今回別冊「井内社寺誌」復刻編集を、井内老人クラブ活性化事業として取組み、井内の各地に点在する社寺の現地踏査を行う途中で、地区の故老より見聞したことが、切っ掛けとなり、我も又手許にある資料と併せ、一編とならんものかと淡き夢のような構想が浮んだ。

井内昔物語と云っても、少し昔の頃であり、大正末期から昭和初期のことであり、然も今迄に話しとしてはあったが、記録として残ってないもの、又残し度いものの中から、忘れさられそうなもの数編を、独断と偏見を交え綴って小冊子としたものである。

世の笑草となるか、又は何かの役に立てば幸なりの思いにて、情報化時代とは云え、その情報に追いつけず、齢八十超の老人の戯言であり、尚各編の冒頭に寸描しているので以下省略する。諸賢の御叱正御高覧賜れば有難き次第なり。

平成十九年十二月吉日

目次

日支事変従軍絵図記録	1
井内の浄瑠璃と佐和利のこと	45
新版歌祭『野崎村之段』	48
仮名手本忠臣蔵『山科隠家の段』	53
宝入舟 松づくし	62
石垣のある民家	63
寅さん物語	67



日支事変従軍絵図記録

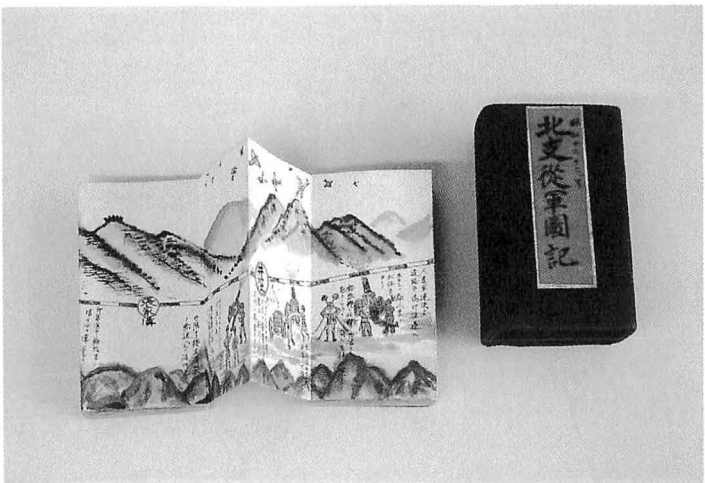
今を去る七十年余前、昭和十二年七月七日払暁、一発の銃声に端を發した日支事変に同年八月二十五年召集令状（赤紙とも云った）を受け、善通寺第十一師団に入隊した井内北間出身の甘井清務氏（故人）陸軍上等兵（昭和十三年十月十二日衛生伍長に任ぜられる）の従軍記録を、甘井氏長男正典さんに依頼して、往時の戦争の壮烈無惨さに想いを馳せ、戦後六十二年の節目の時に平和の尊さ、有難さを学ぶ一助として、井内老人クラブ編の「井内むかし話」の一編と致し度き旨を申述べ御快諾を戴き、平成十九年五月より、東温市立歴史民俗資料館職員の協力指導により、図化入力したものであり、その記録は、詳細克明に描かれた臨場感溢れるものである。

中支北支の山野を馳せ巡り、何時敵襲を受けるやも知れない戦場、道なき行軍、水なく炊事食事不能で野営転戦「夜行軍道ニ迷ヒ延着」など記録中豊台にて「敵地始メテノ宿舎、十月一日午前六時敵地へ第一歩ヲ印ス：」又郷里の出身者との出会「北支ニ於ケル最初ノ強行軍ニテ心身共ニ疲労ノ極ニ達ス十月三日午後八時到着、川上、長曾我部氏、宇和川君、三内出身陸上輜卒隊トシテ居リ：」又「十一月十九日三内出身五名面会ス」などの記録あり、甘井氏の戦地での一息の癒しであり「月明ニ遙カ故郷ヲ懷ブ」など、古里へ両親妻子を残しての出征であり、万感迫るものがある。

之が戦争であり、義務であった。わたしも又戦歴の体験者として、今にして思えば、内心忸怩たる感を禁じ得ない。然し此の事を後世に語継ぐ機会として、貴重な記録を此の儘眠らすに忍びず、発刊した次第である。

一人でも多くの方々に読んで戴き、今日の平和の礎となった往時を振り返り、何らかの示唆になればと念じつつ……。

平成十九年十一月吉日



(凡例)

- (一) 上段は從軍記録原本写
下段は今回の書き下しである。
- (二) 末尾の地図は甘井氏の転戦した
地区を追って今回地図に辿った。

(北支の部)

日支事変從軍記録

北支派遣軍乙集団兵站部

大野部隊医務室

衛生上等兵 甘井 清務

昭和十三年十月十二日任 衛生伍長 (於端昌) 共計

勲七等青色銅葉章賜フ

金 参百五十拾円 昭和十五年四月二十九日付

召集令、 昭和十二、八、二五 午前三時半

入 隊、 全 十二、八、二八、午後一時

部 署、 第十一師団第一兵站輜重兵中隊

(善通寺山砲第十一聯隊編成)

満期 昭和十四年二月二十八日

(北支の部)

日支事変從軍記録

北支派遣軍乙集団兵站部

大野部隊醫務室

衛生上等兵 甘井 清務

昭和十三年十月十二日任 衛生伍長 (於端昌) 共計

勲七等青色銅葉章賜フ

金 参百五十拾円 昭和十五年四月二十九日付

召集令、 昭和十二、八、二五 午前三時半

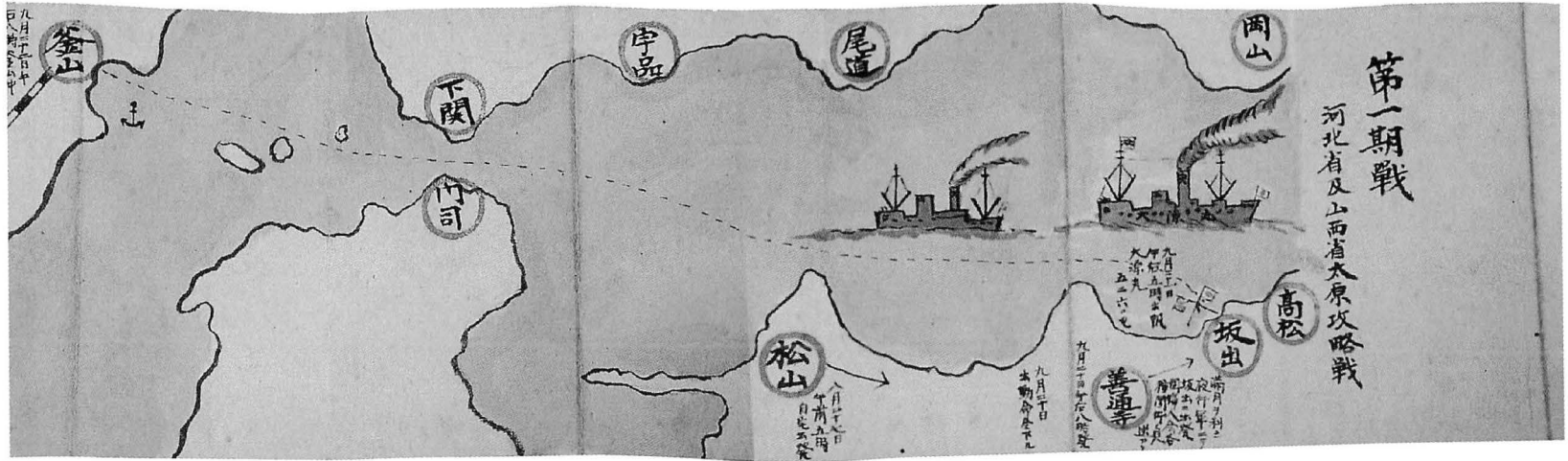
入 隊、 全 十二、八、二八、午後一時

部 署、 第十一師団第一兵站輜重兵中隊

満期

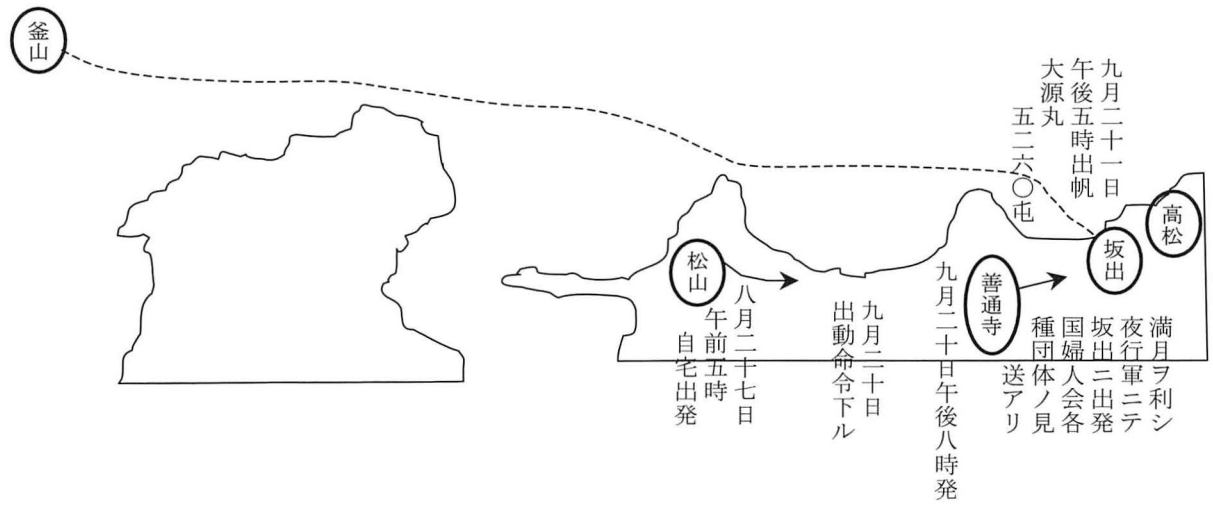
(善通寺山砲第十一聯隊編成)

昭和十四年二月二十八日



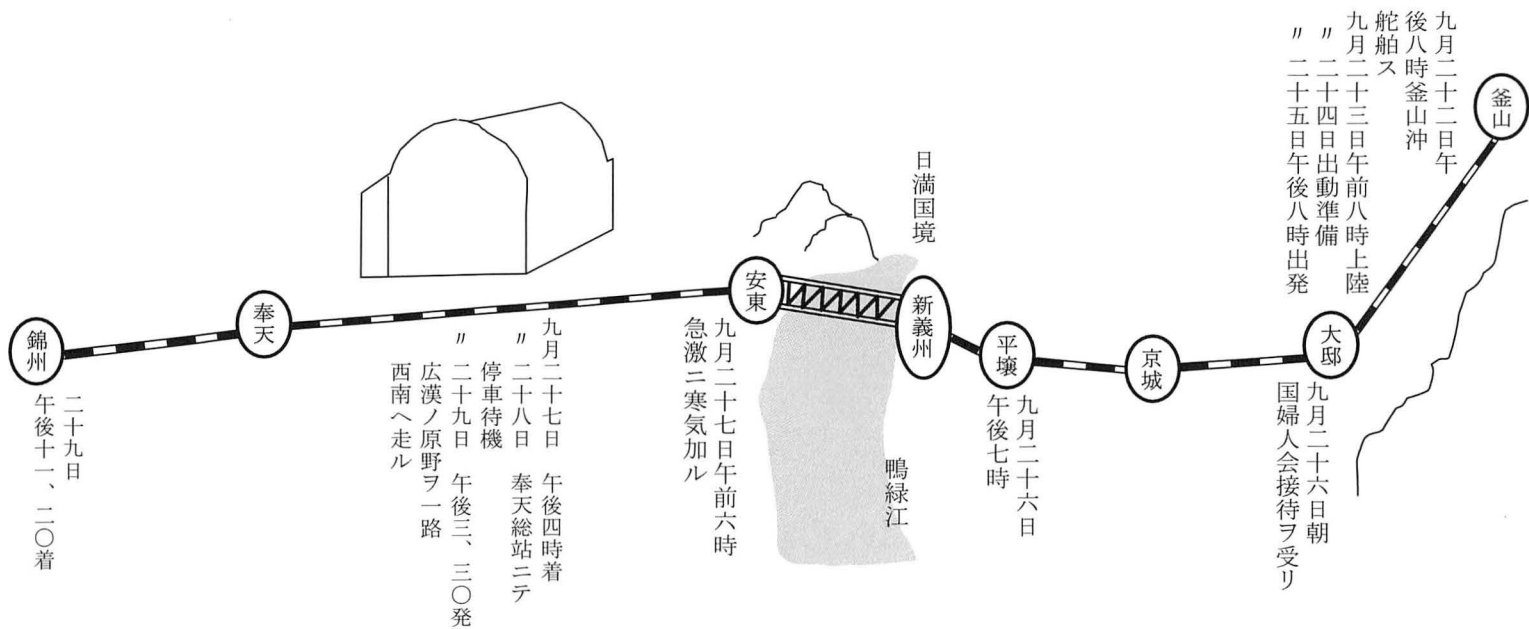
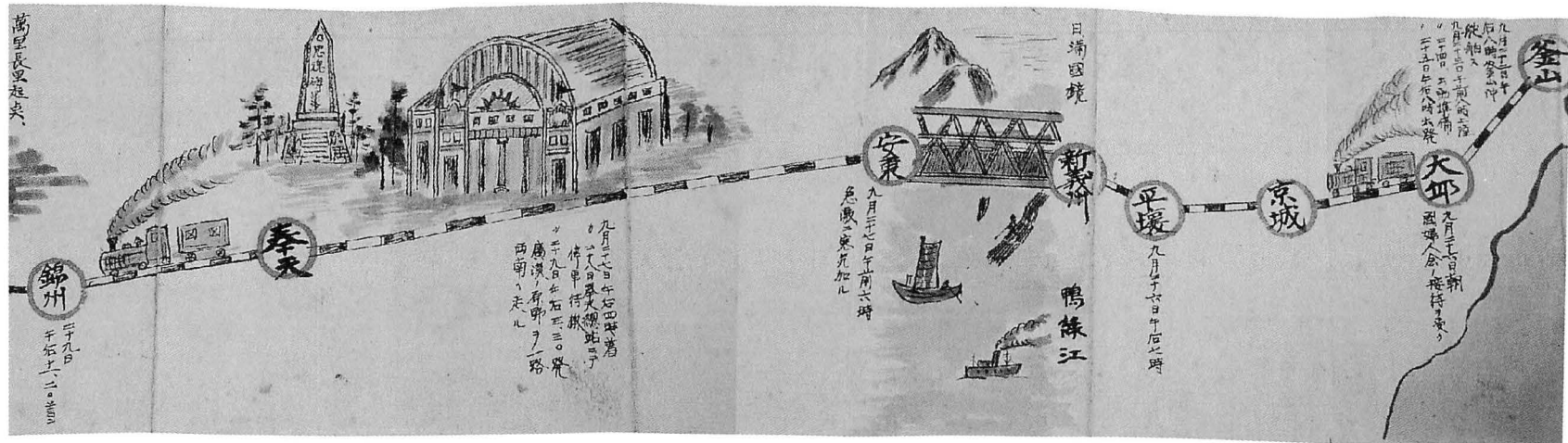
第一期戦

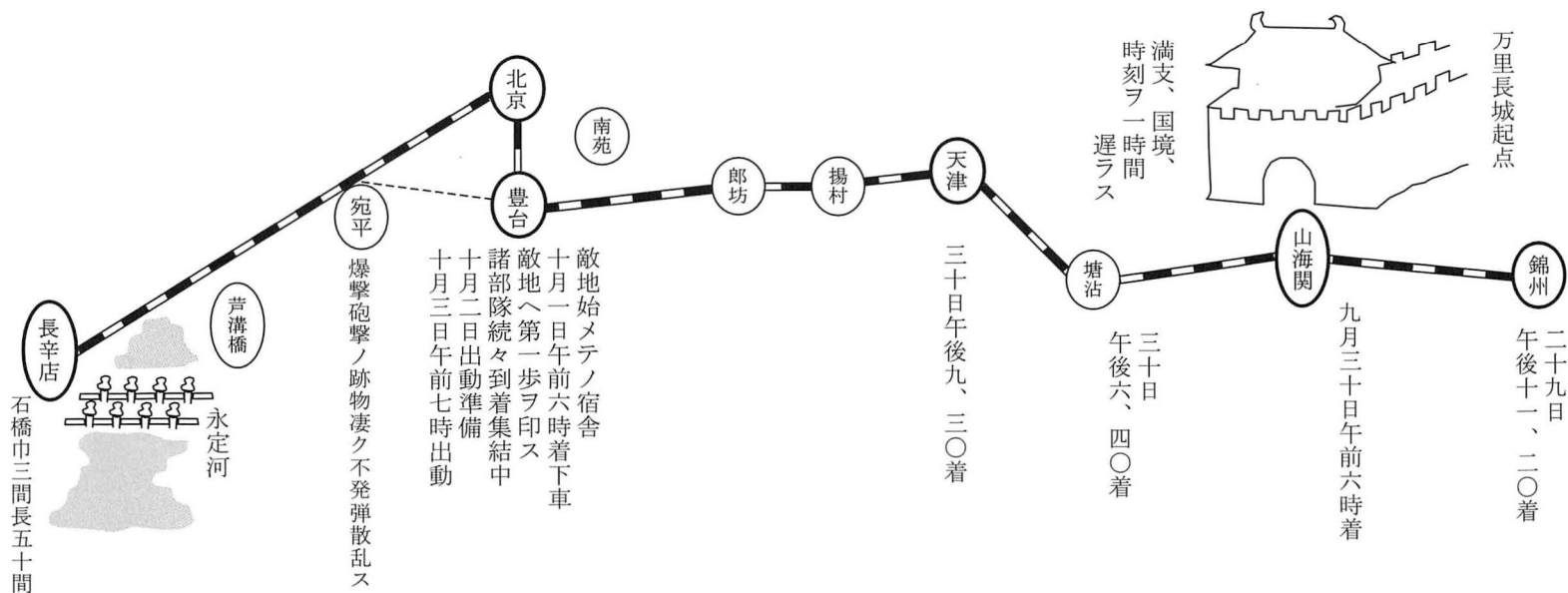
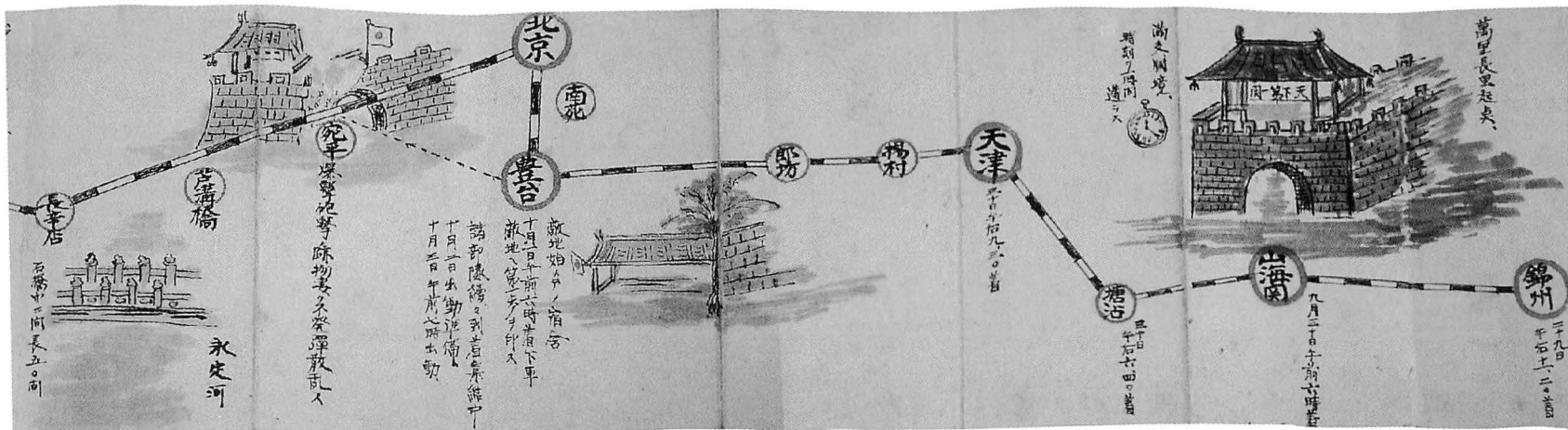
河北省及山西省太原攻略戦

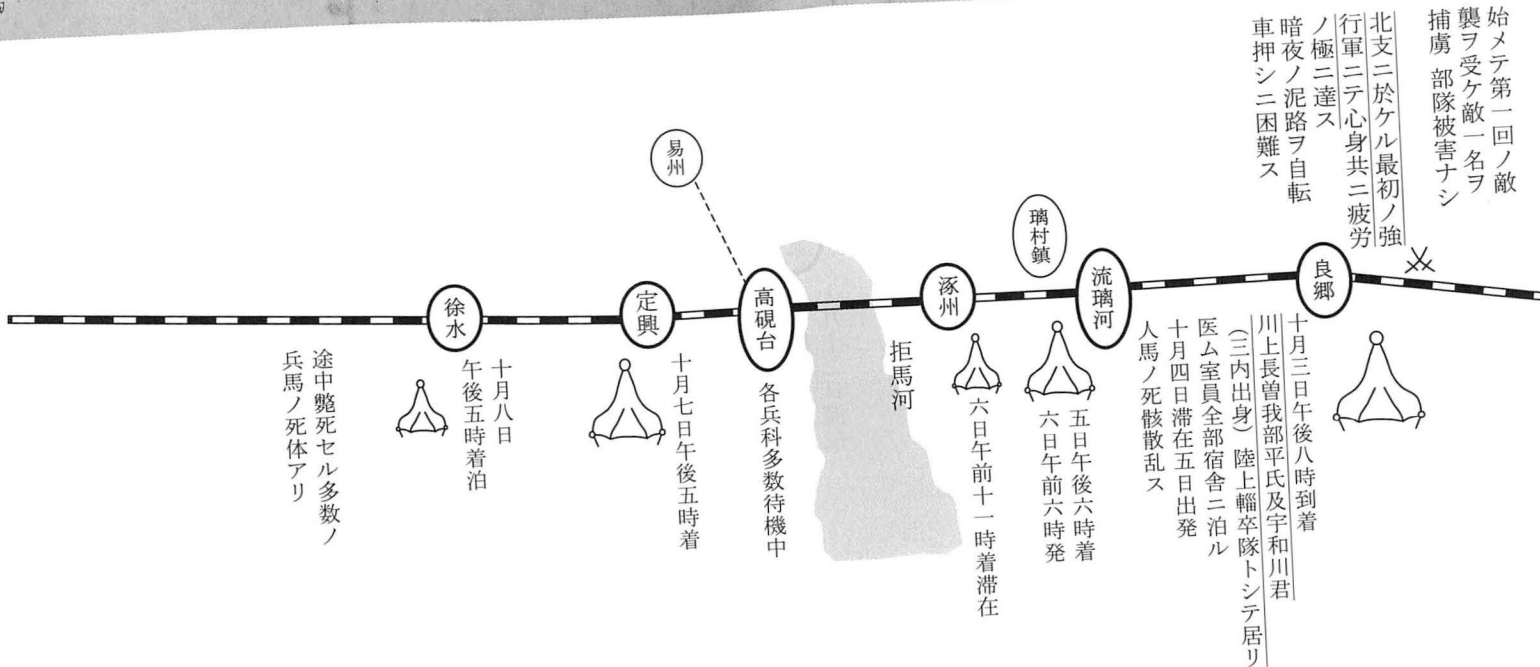
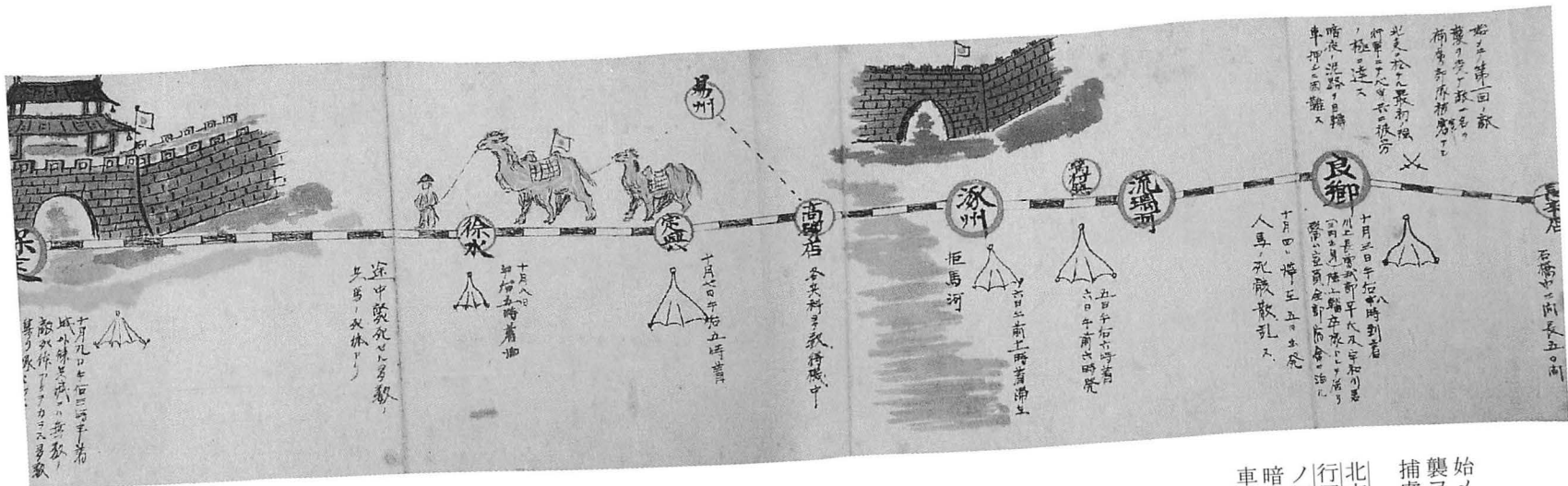


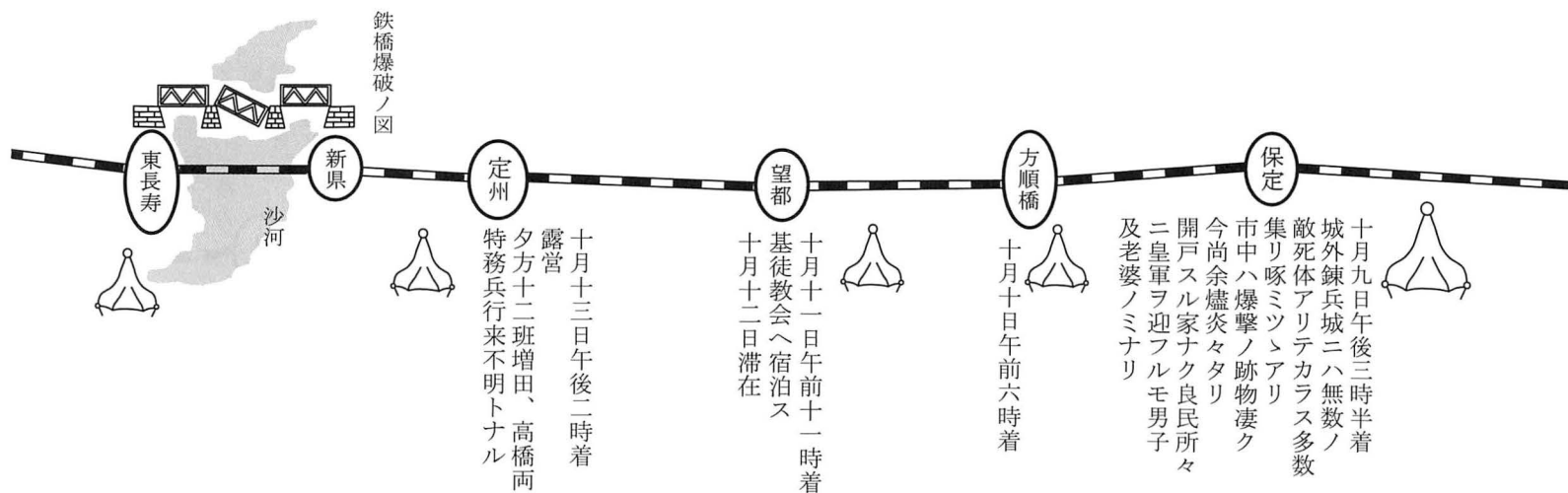
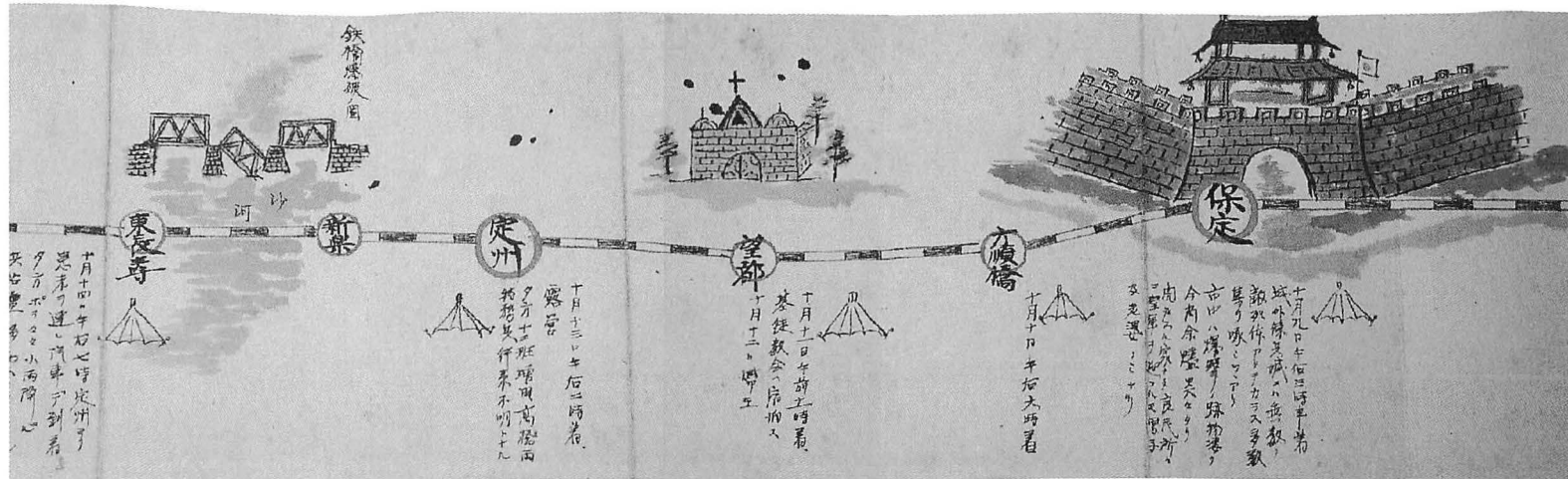
第一期戦

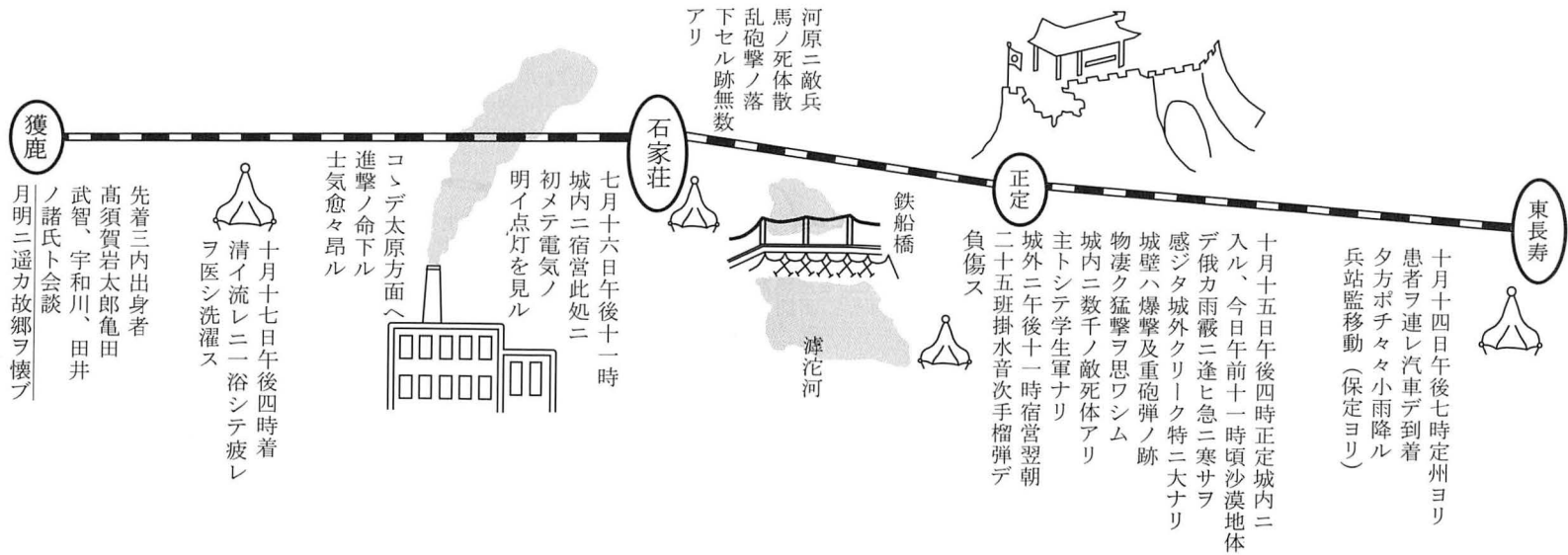
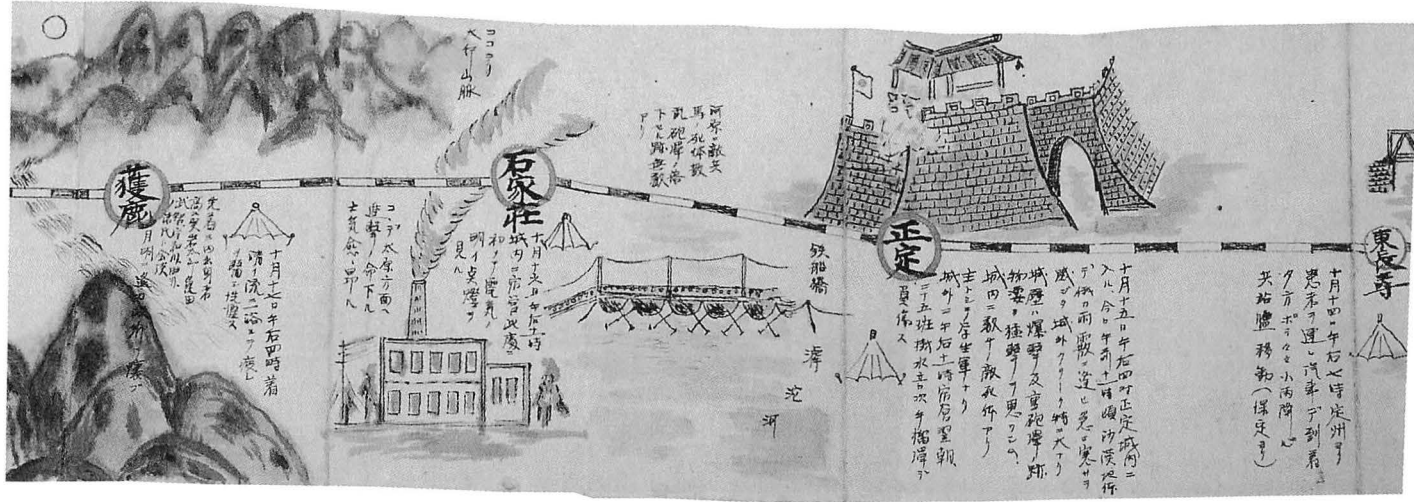
河北省及山西省太原攻略戦

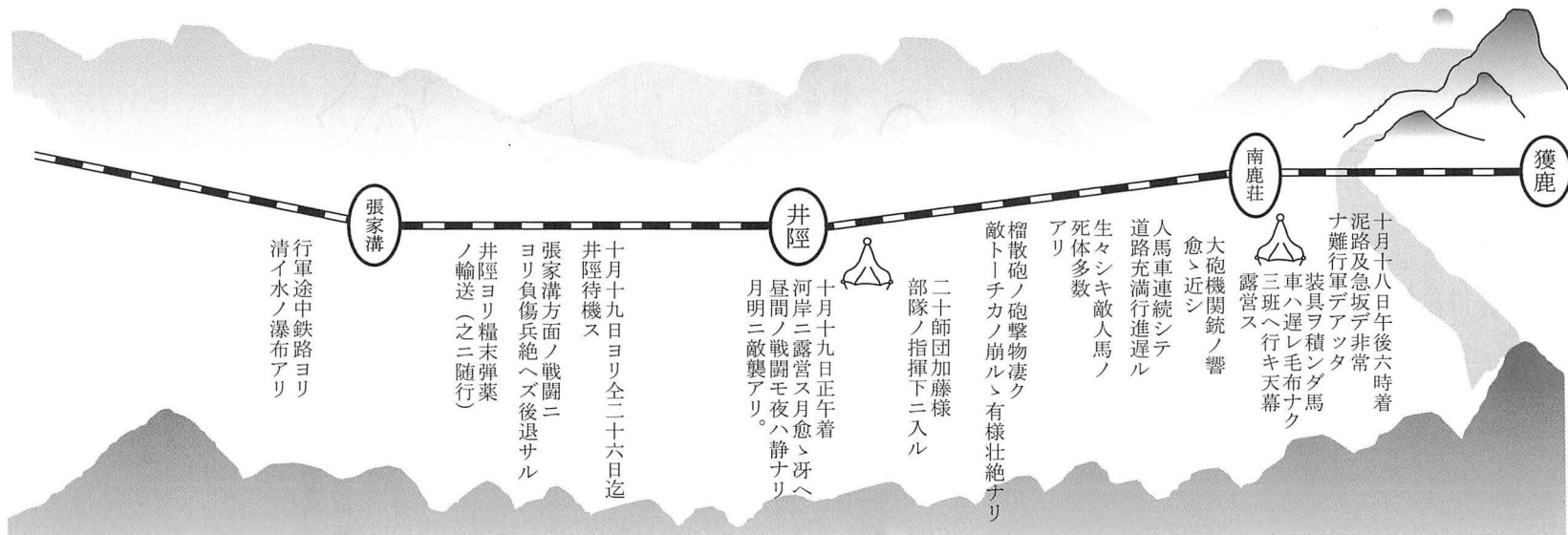


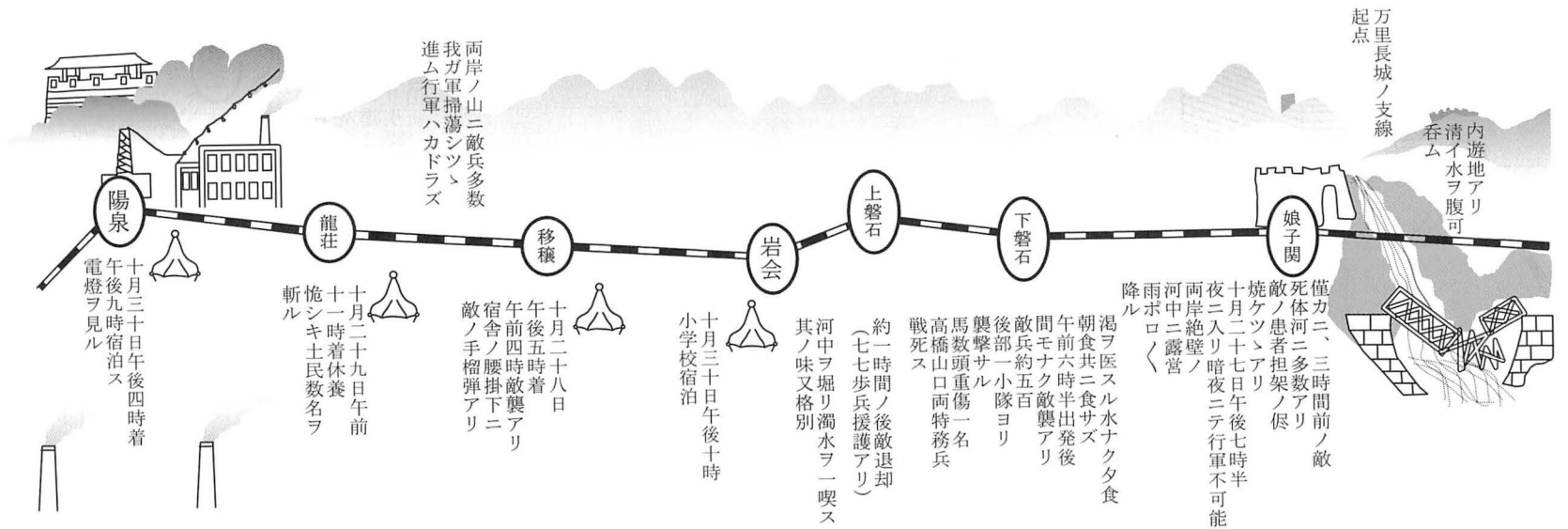
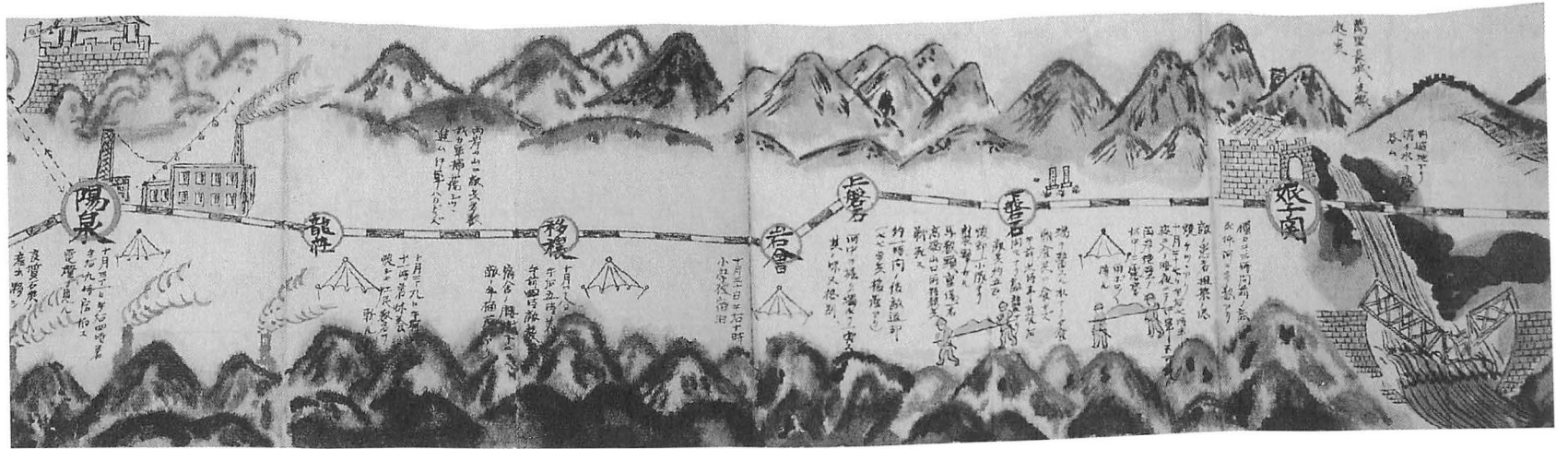


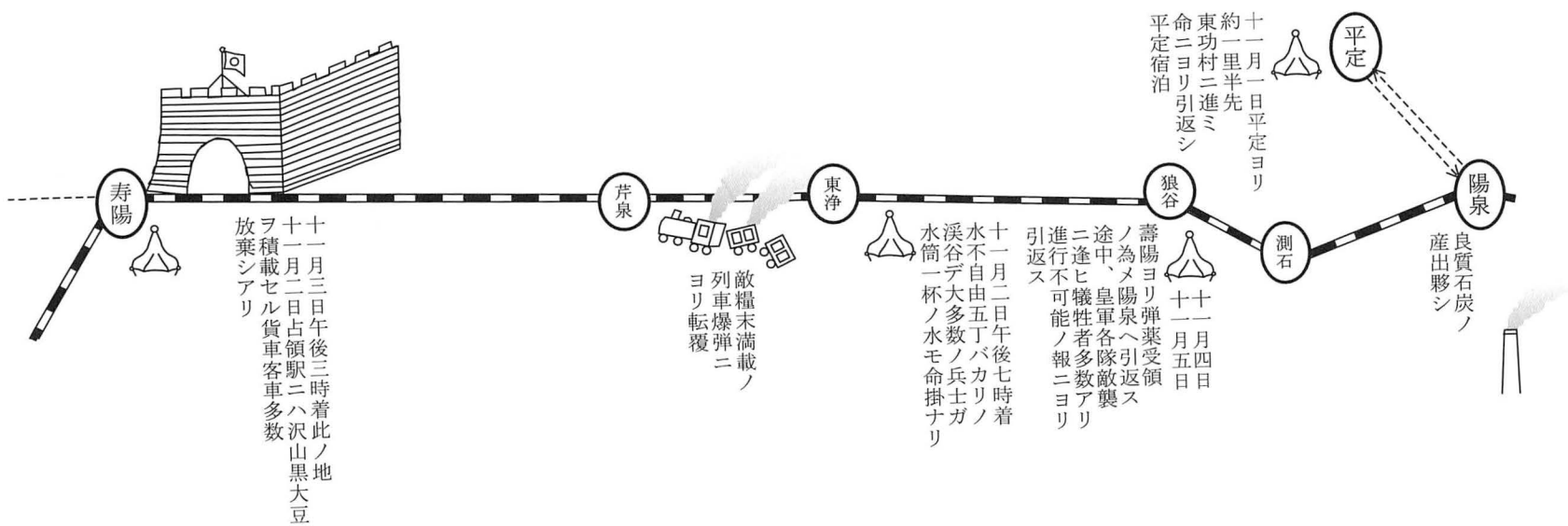
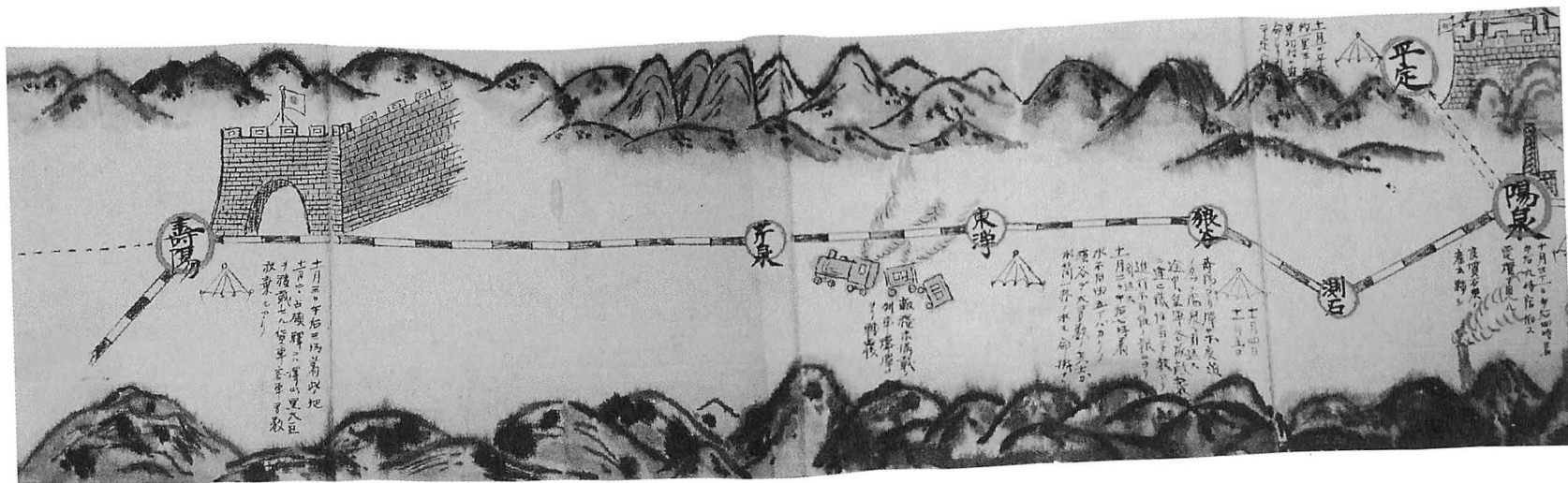


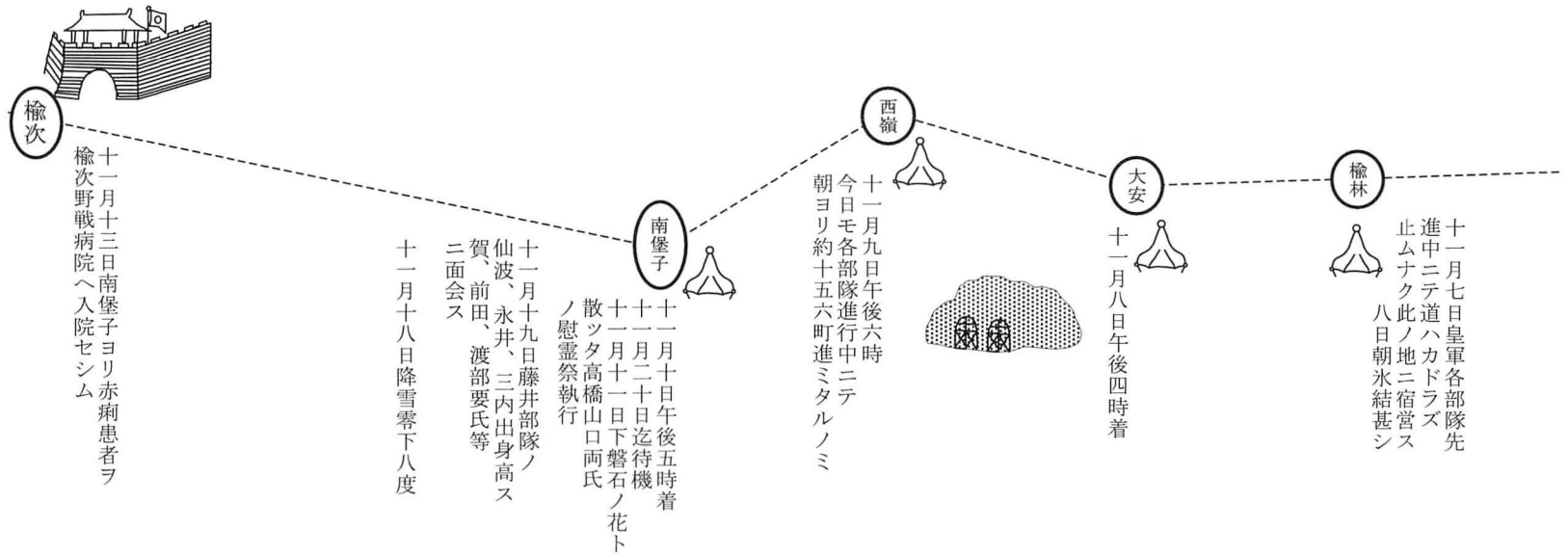
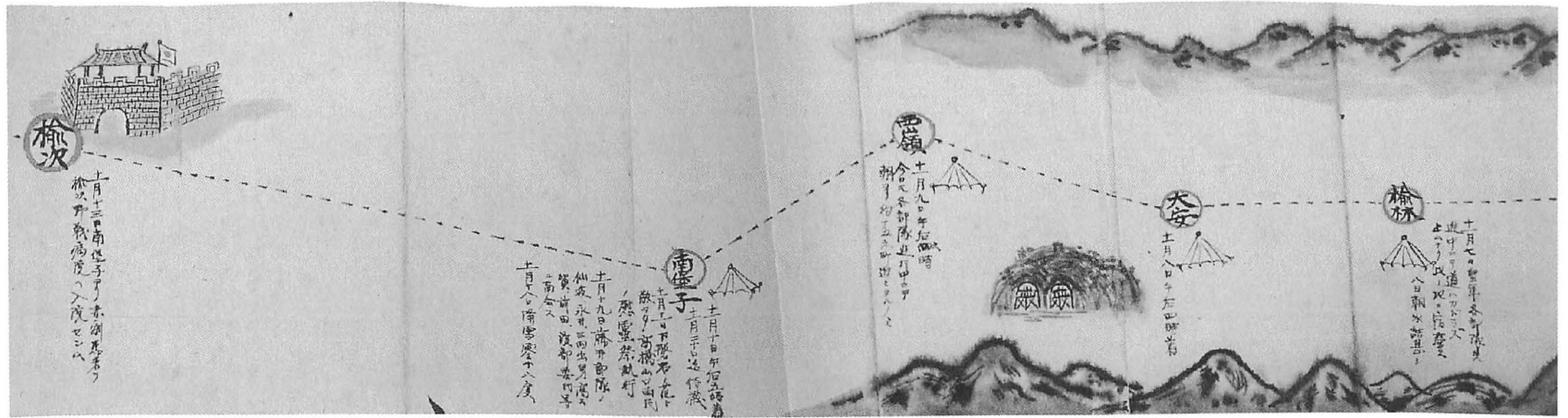


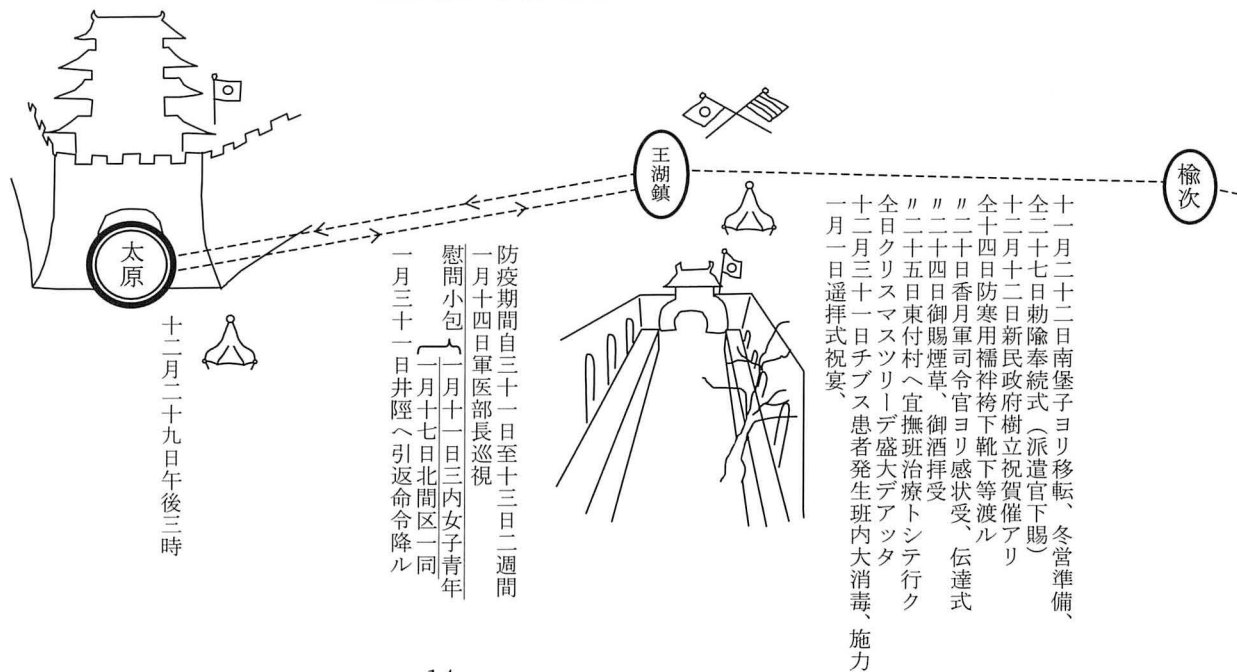
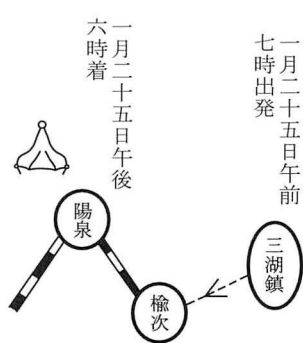
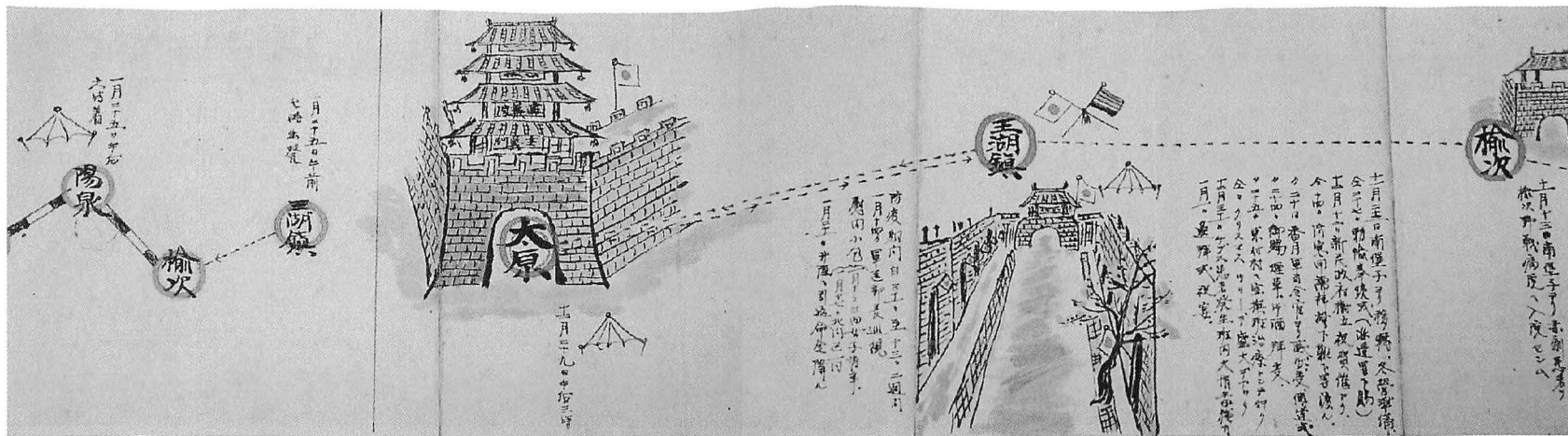


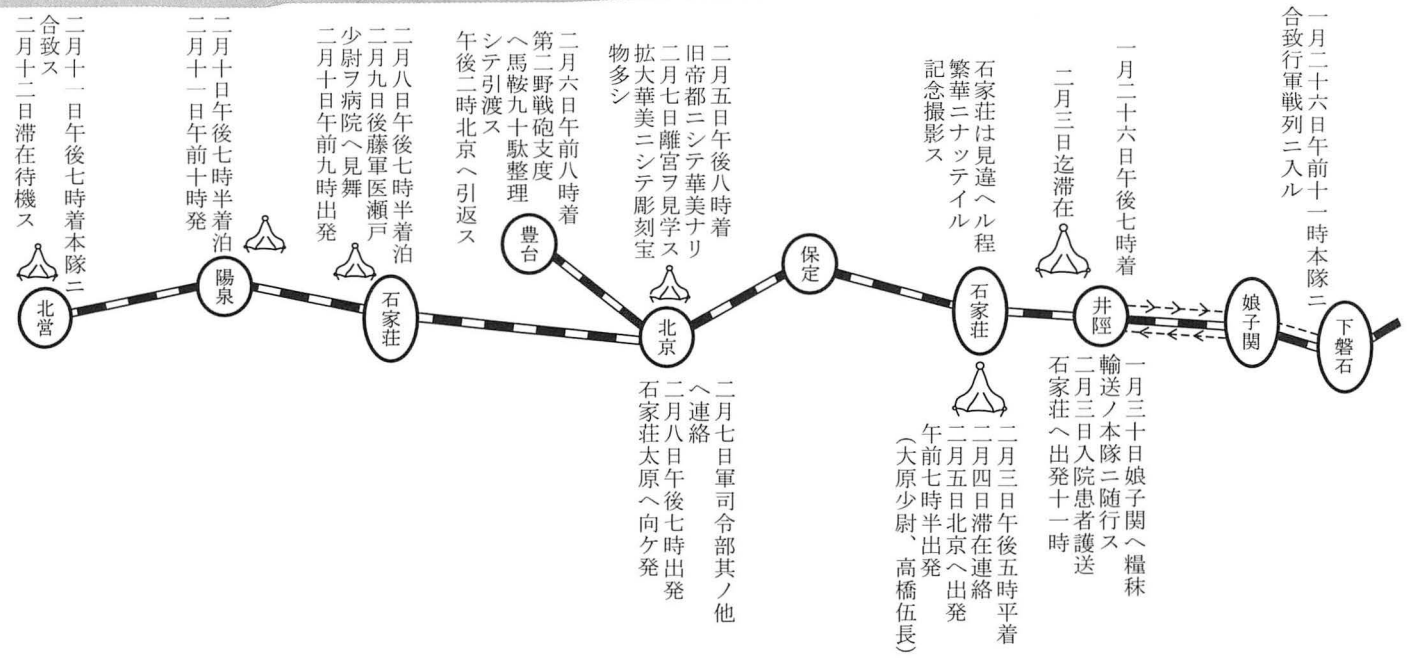
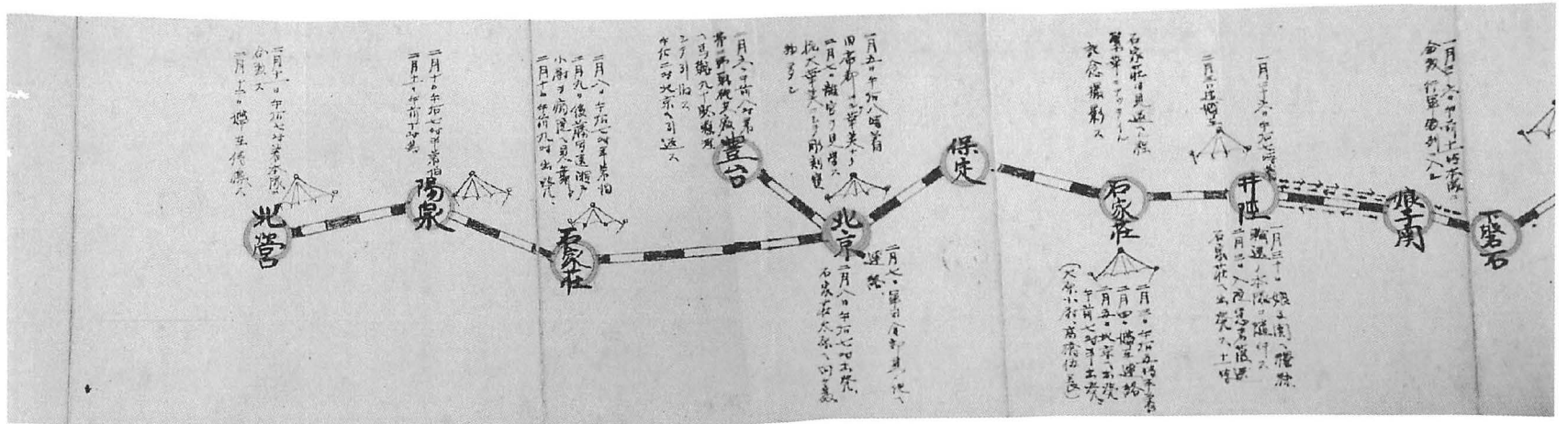


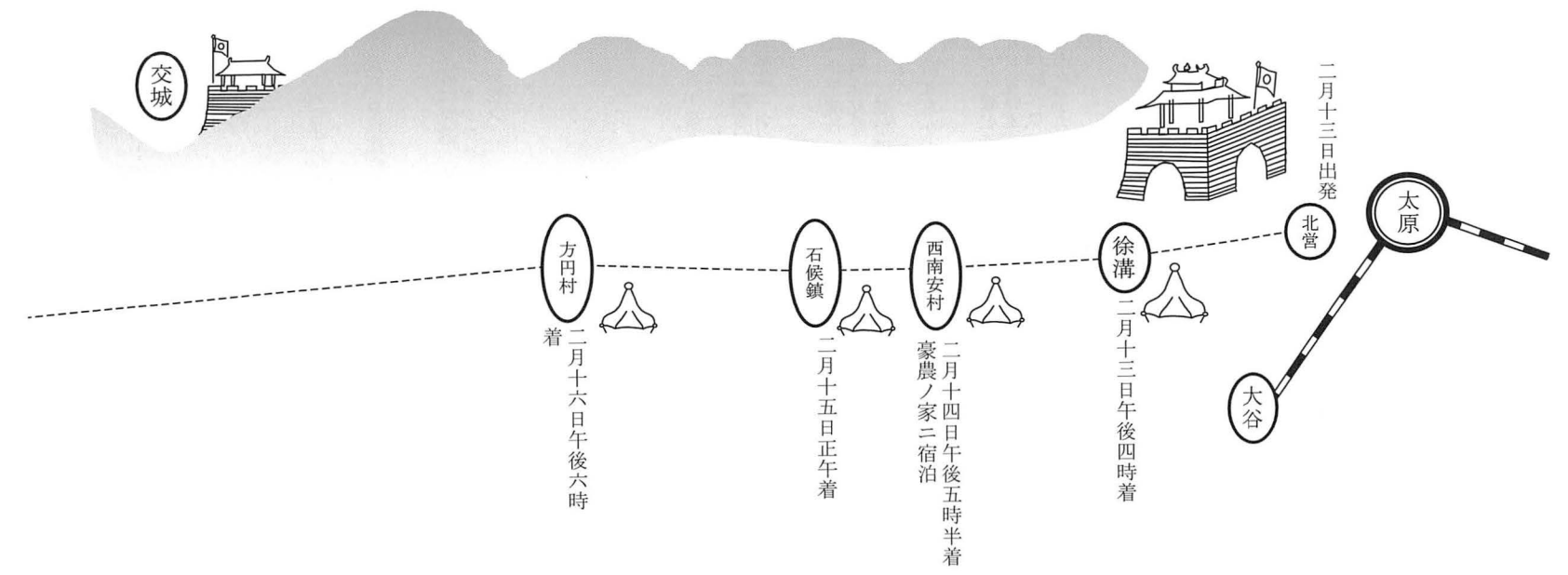
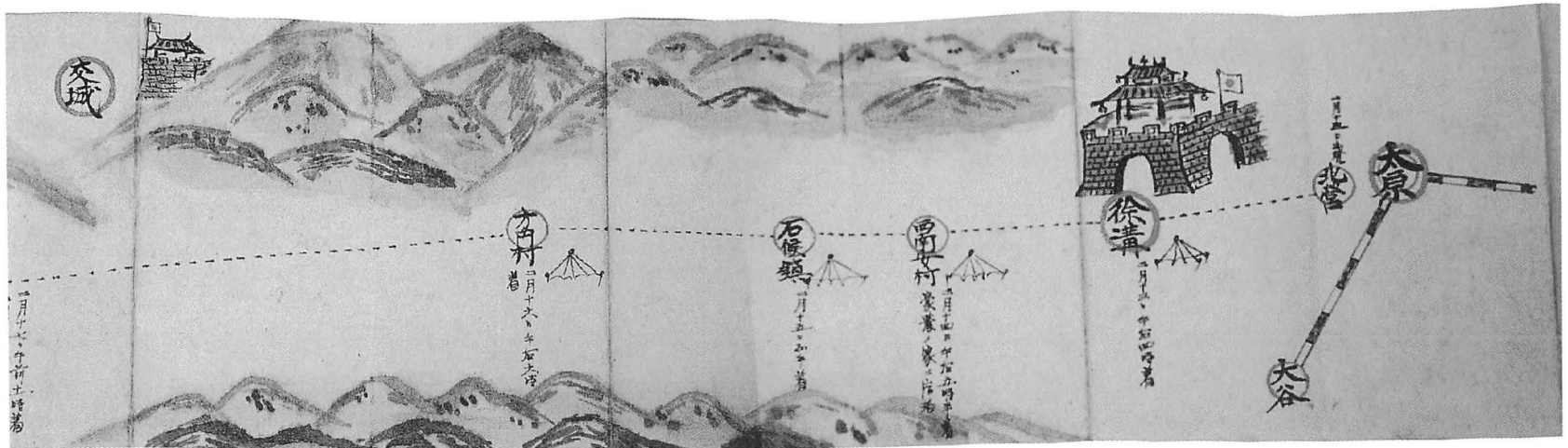






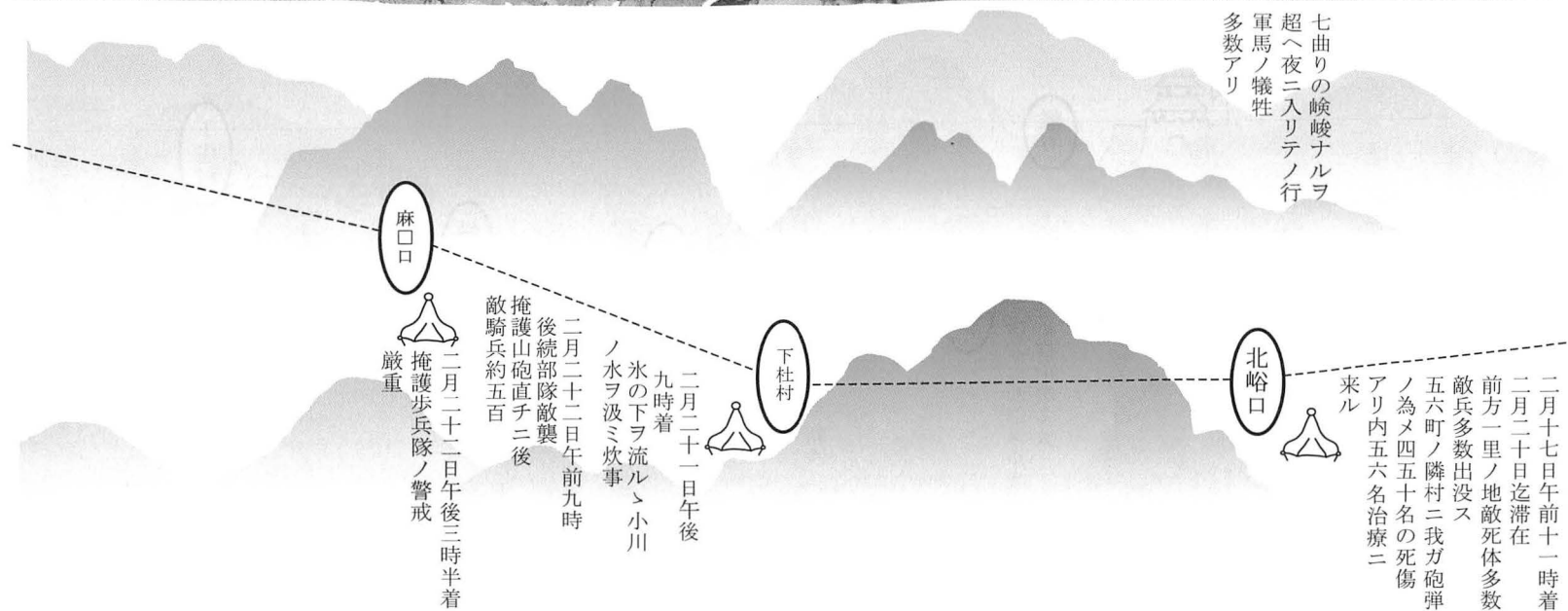


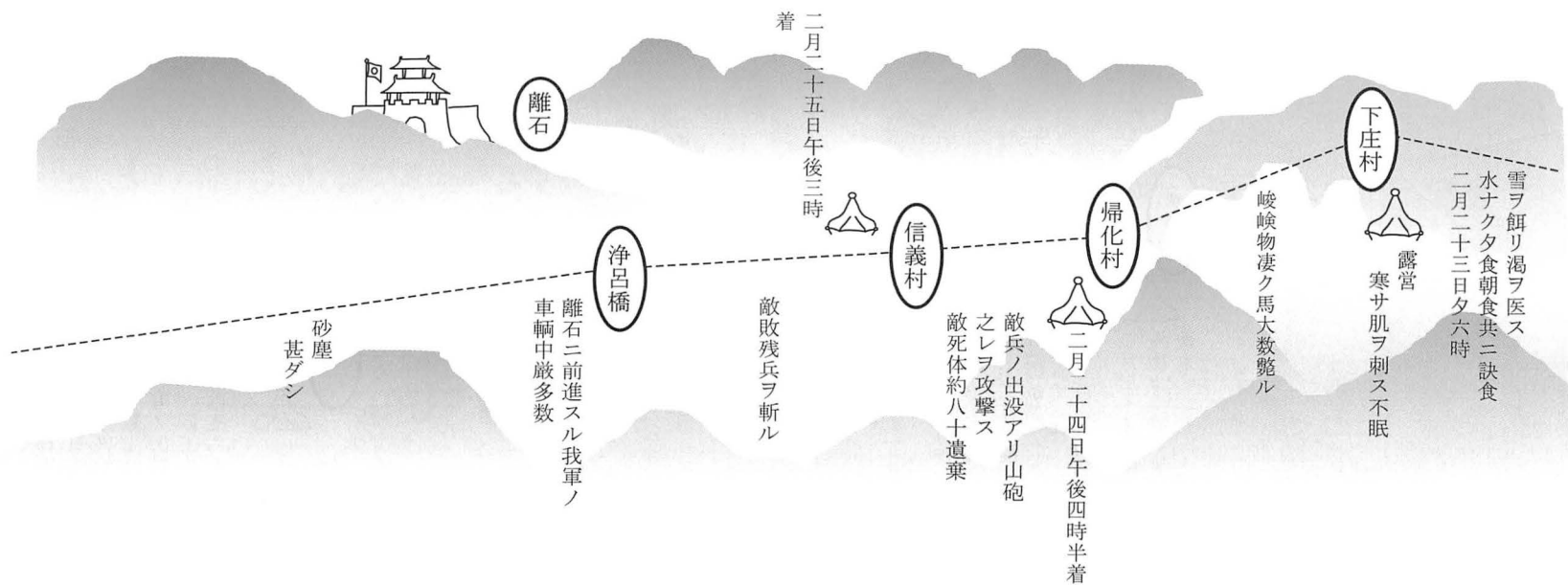
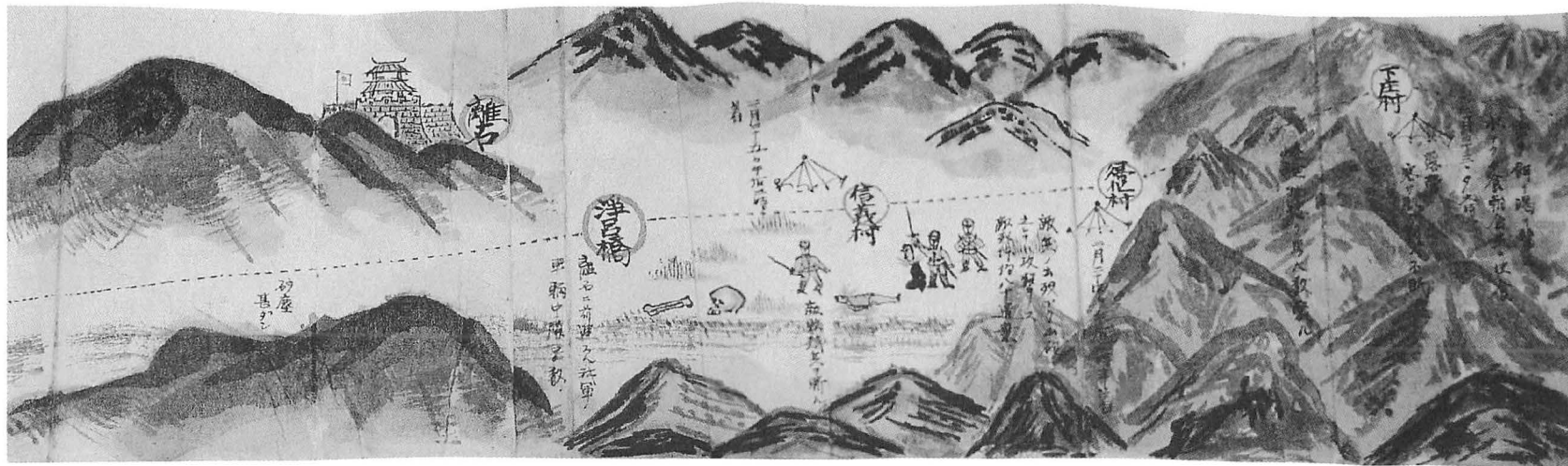


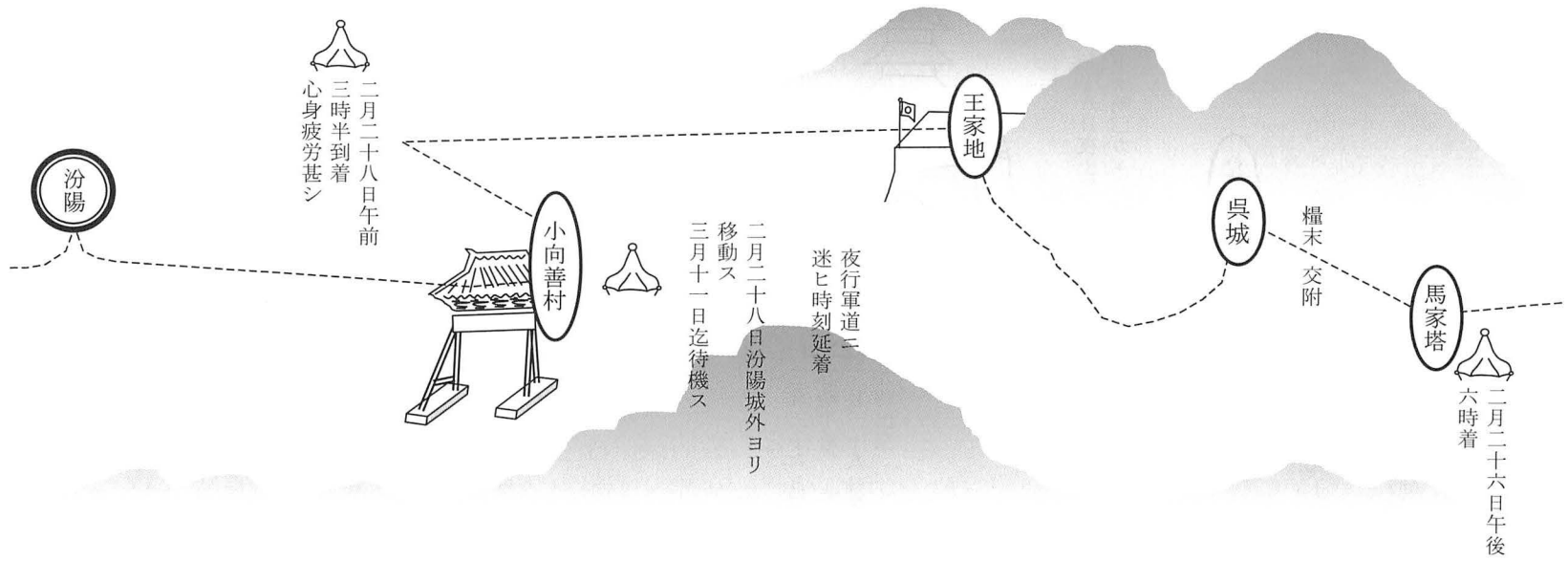
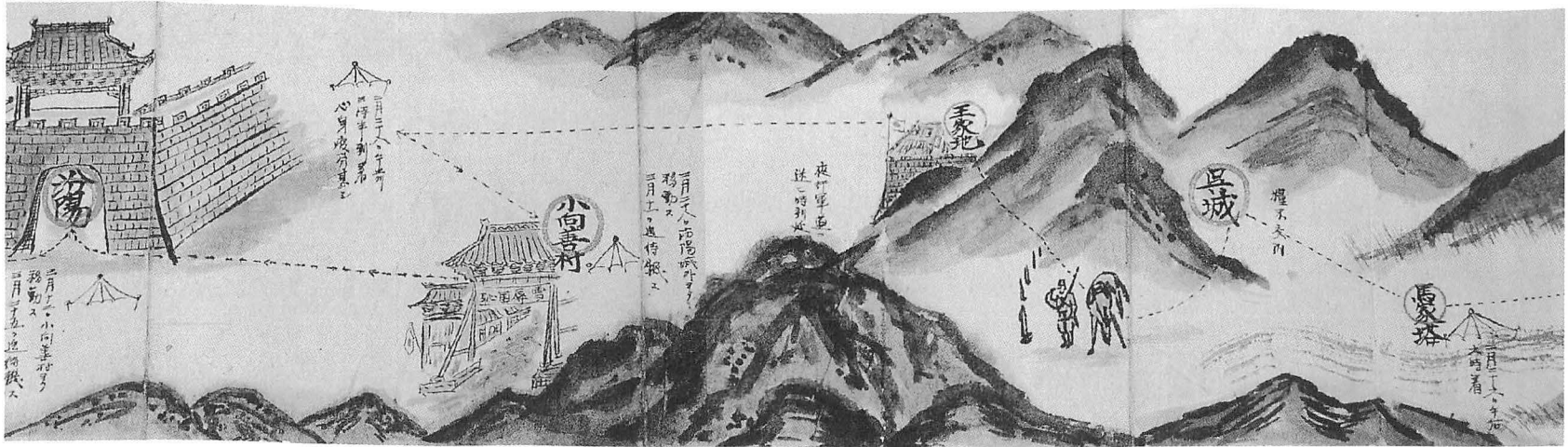


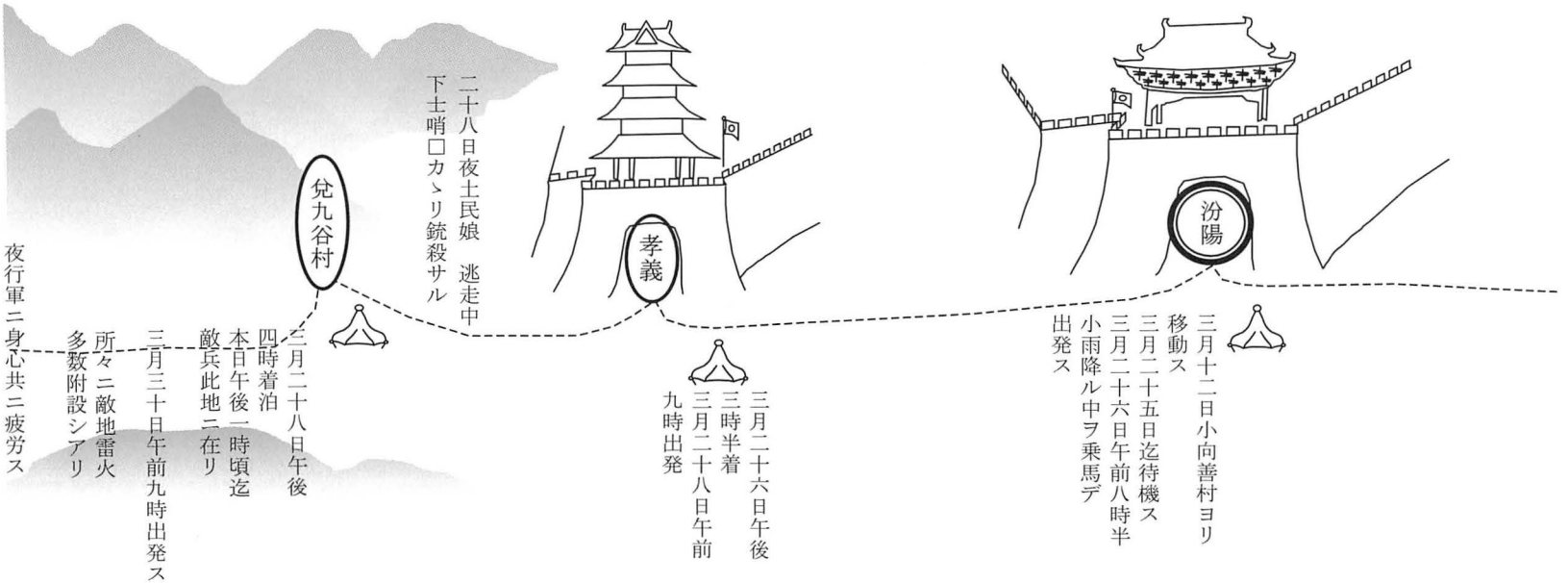
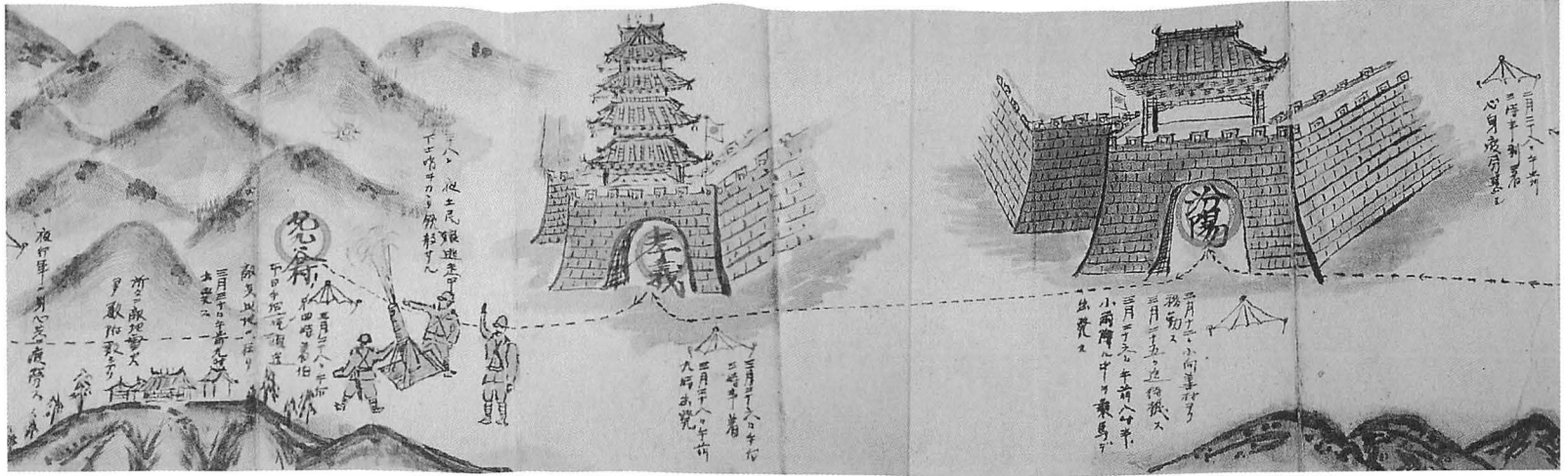


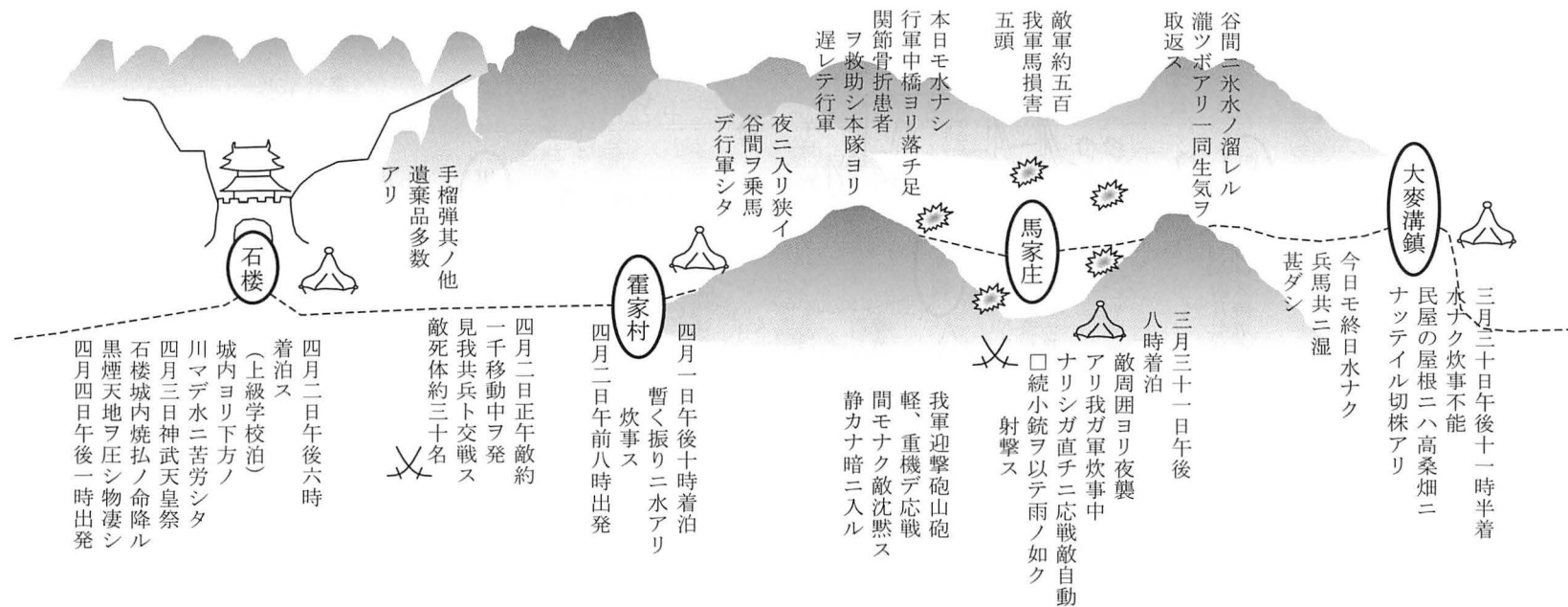
七曲りの峻峻ナルヲ
超へ夜二入りテノ行
軍馬ノ犠牲
多数アリ

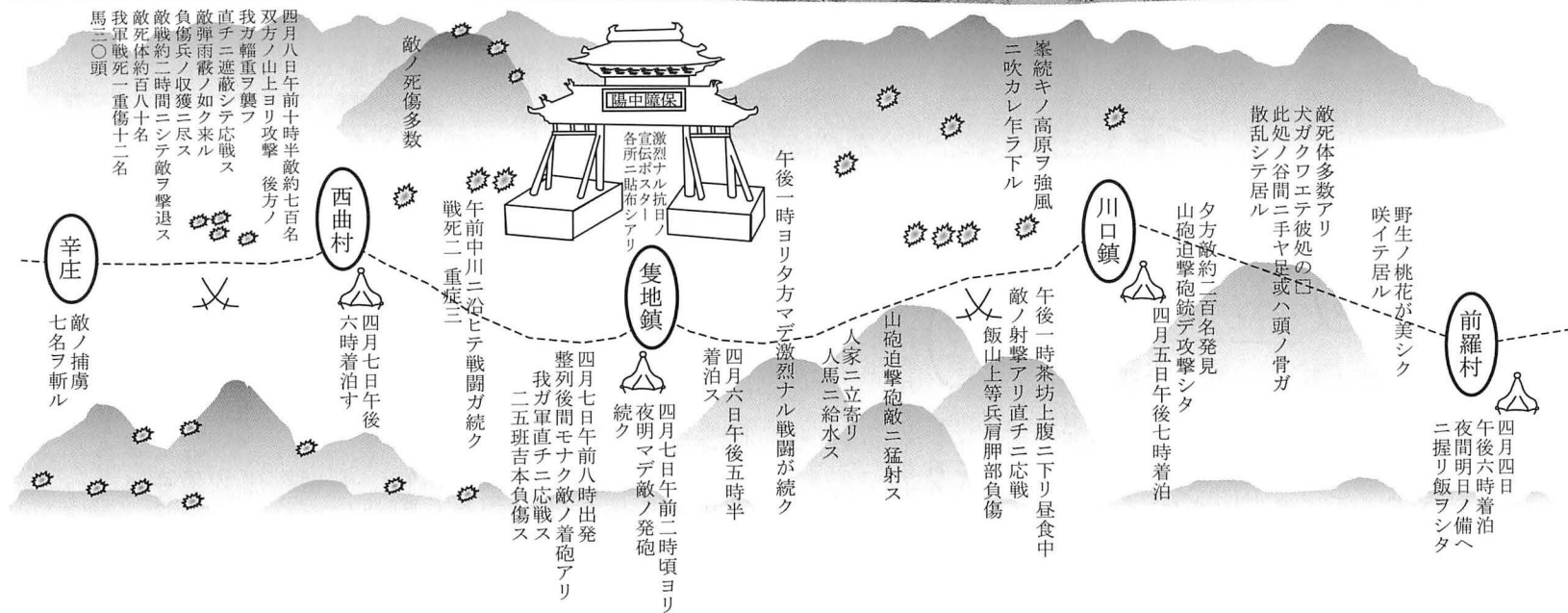


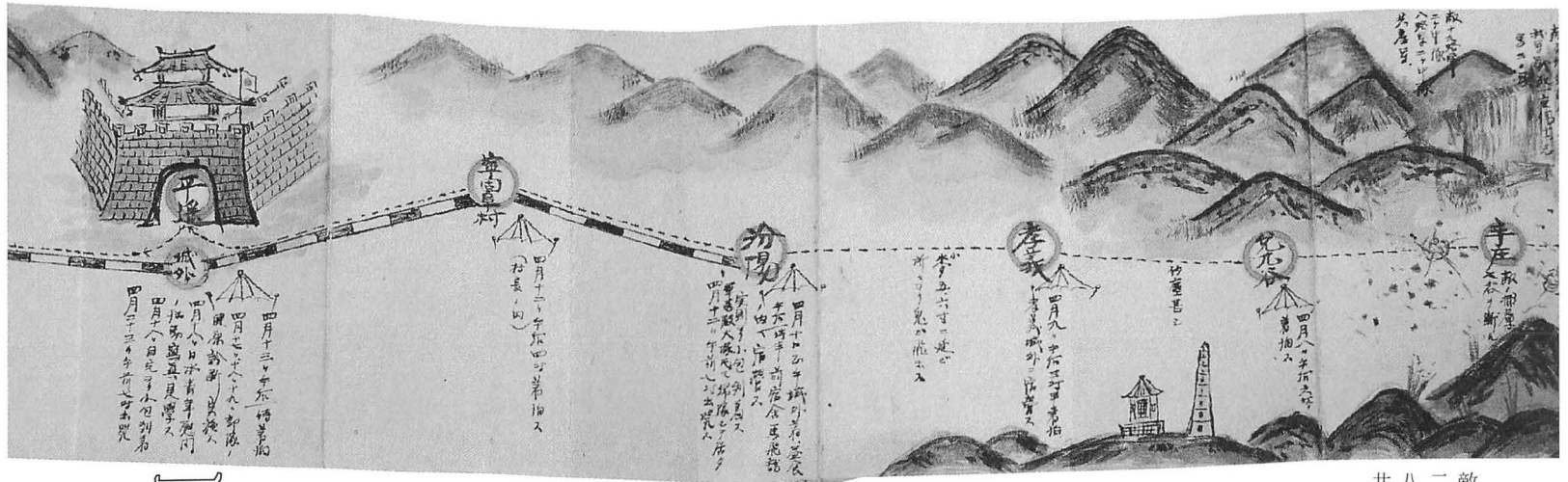




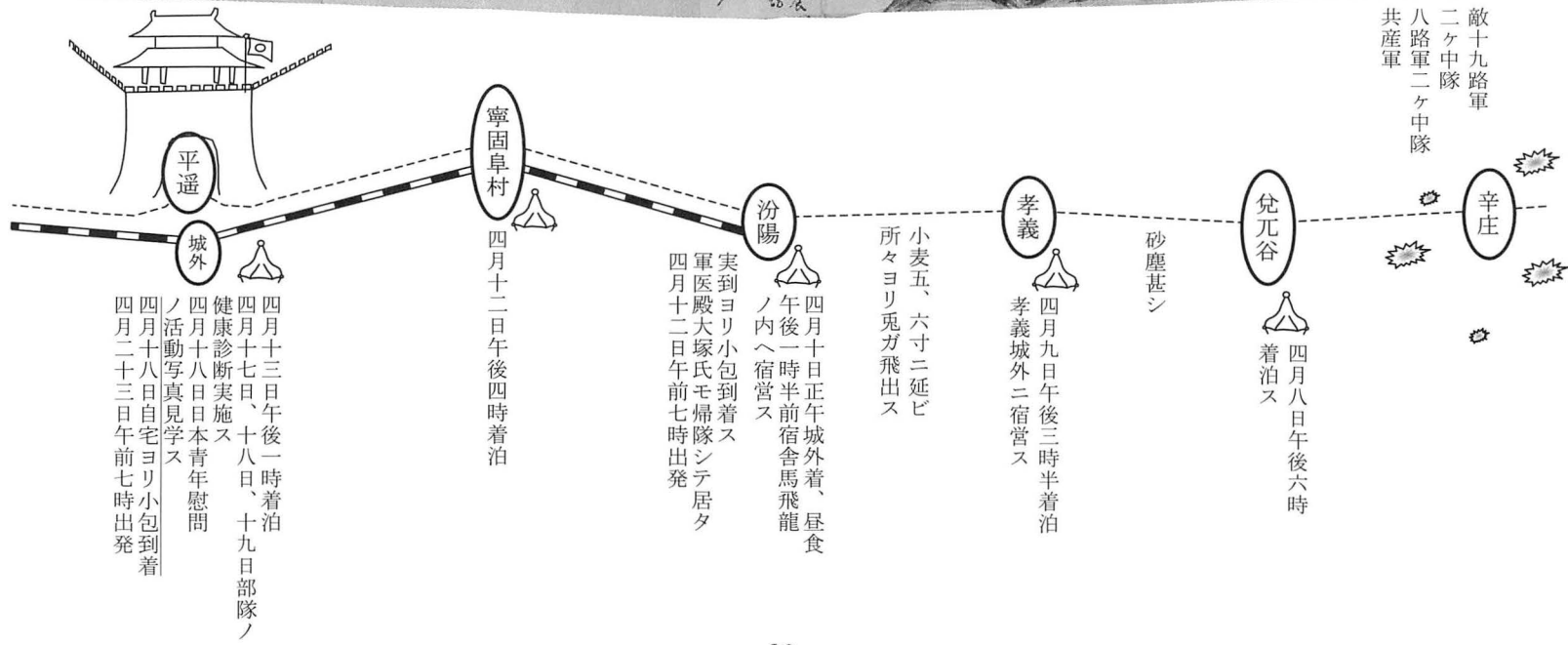


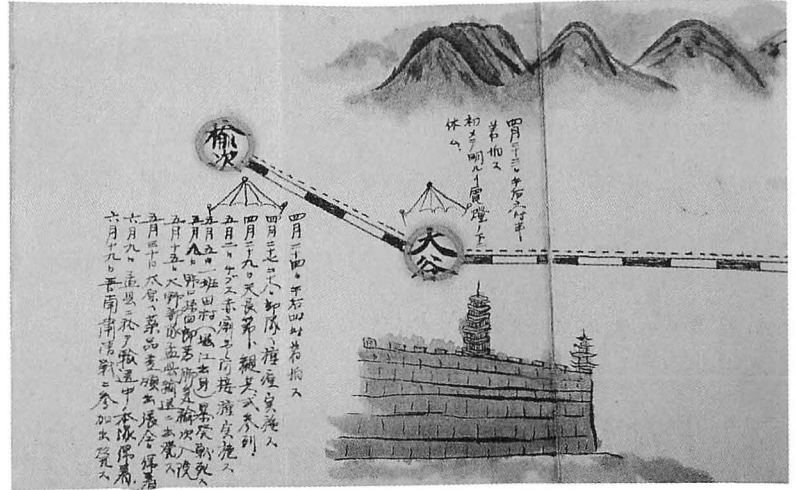




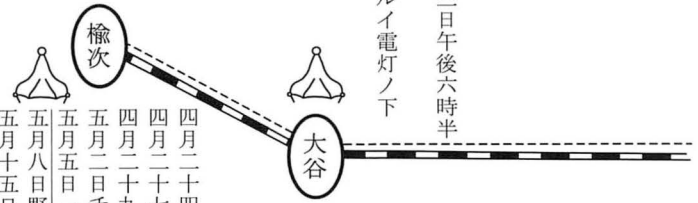


敵十九路軍
二ヶ中隊
八路軍二ヶ中隊
共産軍





四月二十三日午後六時半
着泊ス
初メテ明ルイ電灯ノ下
休ム



四月二十四日午後四時着泊ス
四月二十七日二十八日部隊へ種痘実施ス
四月二十九日天長節、観兵式参列
五月二日チブス赤痢予防接種実施ス
五月五日一班田村(堀江出身)暴発戦死ス
五月八日野口孫四郎君脚気榆次入院(井内出身)
五月十五日大野部隊孟具輸送ニ出發ス
五月三十日太原へ藥品受領出張同日帰着
六月九日孟具ニ於テ輸送中ノ本隊帰着
六月十九日晋南肅清戦ニ参加出發ス

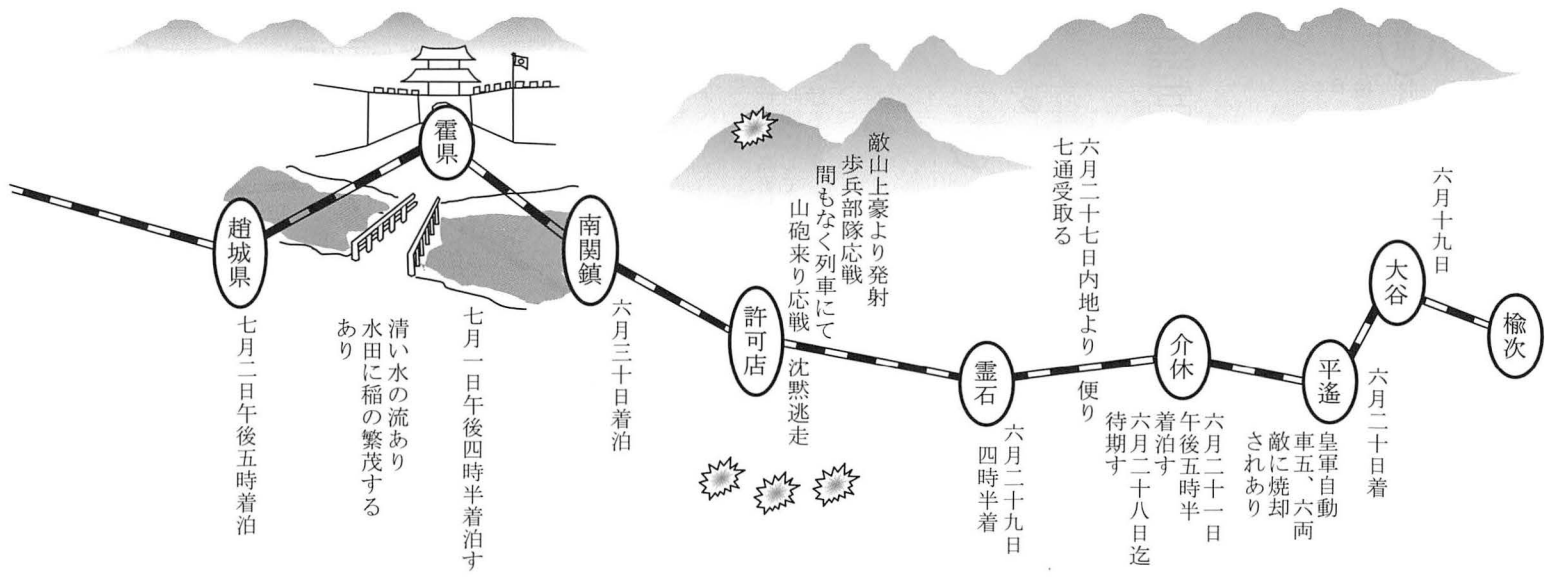
晋南肃清戦

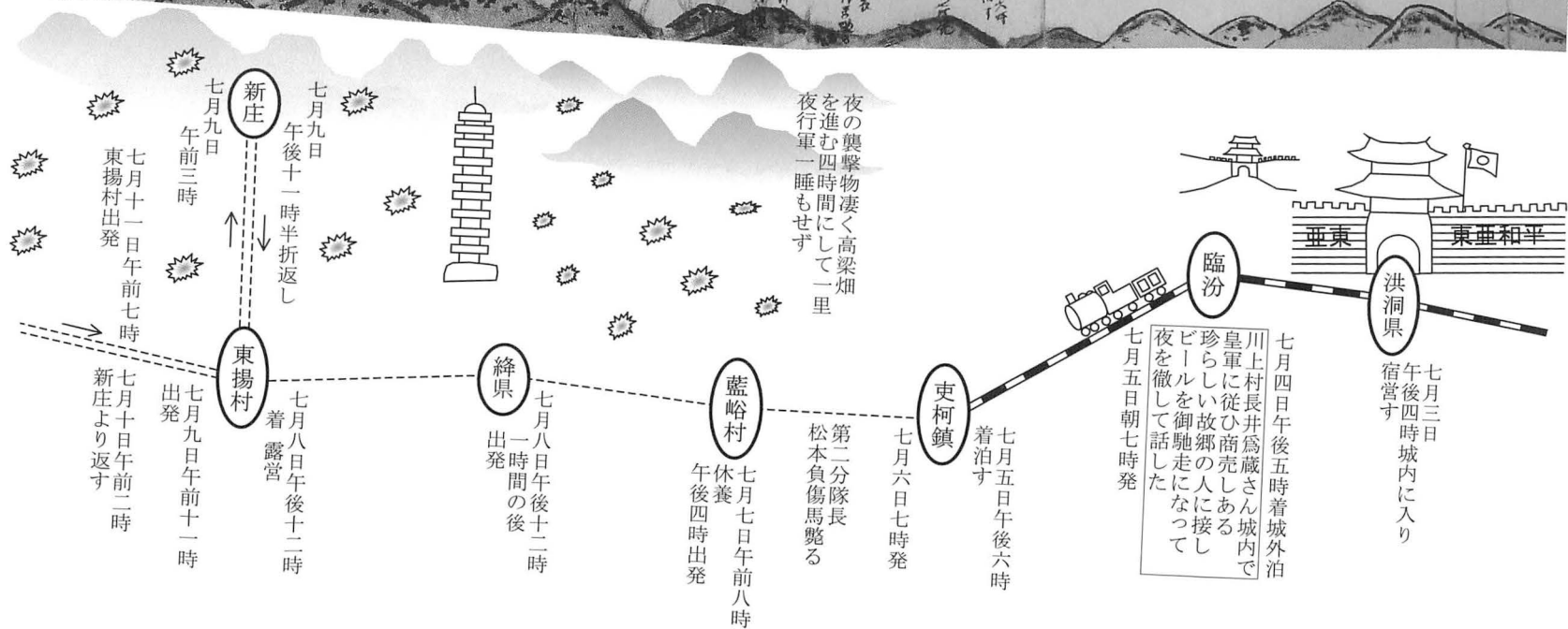
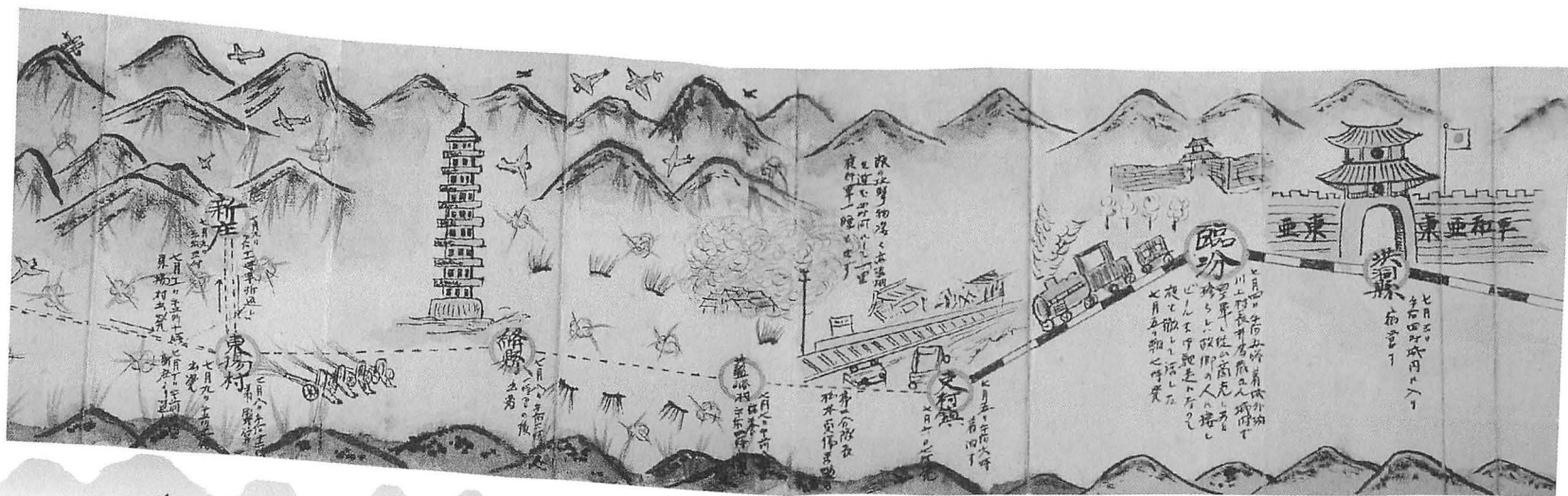
昭和十三年六月十九日（榆次）

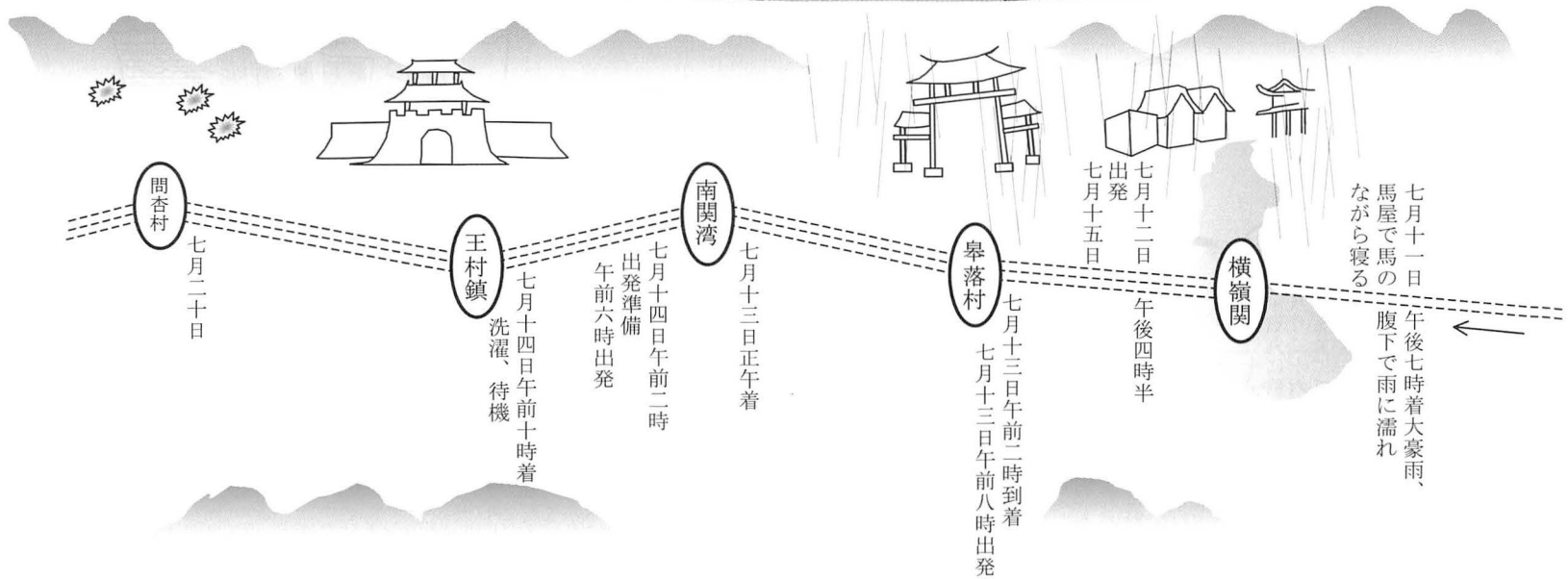
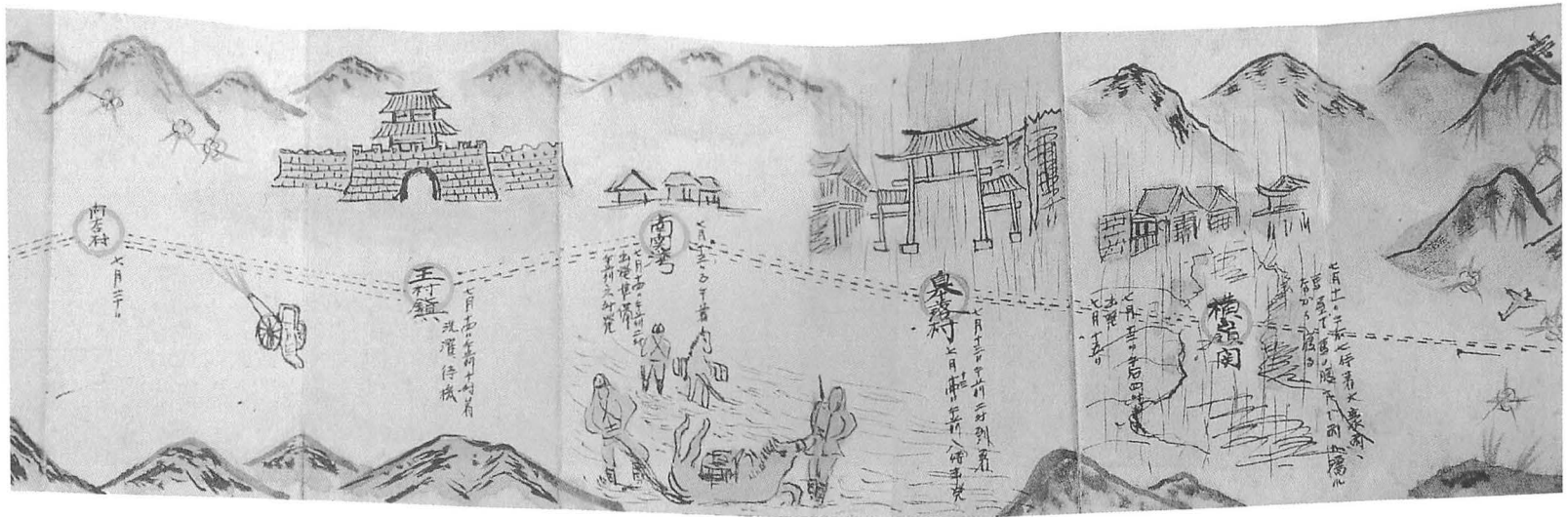


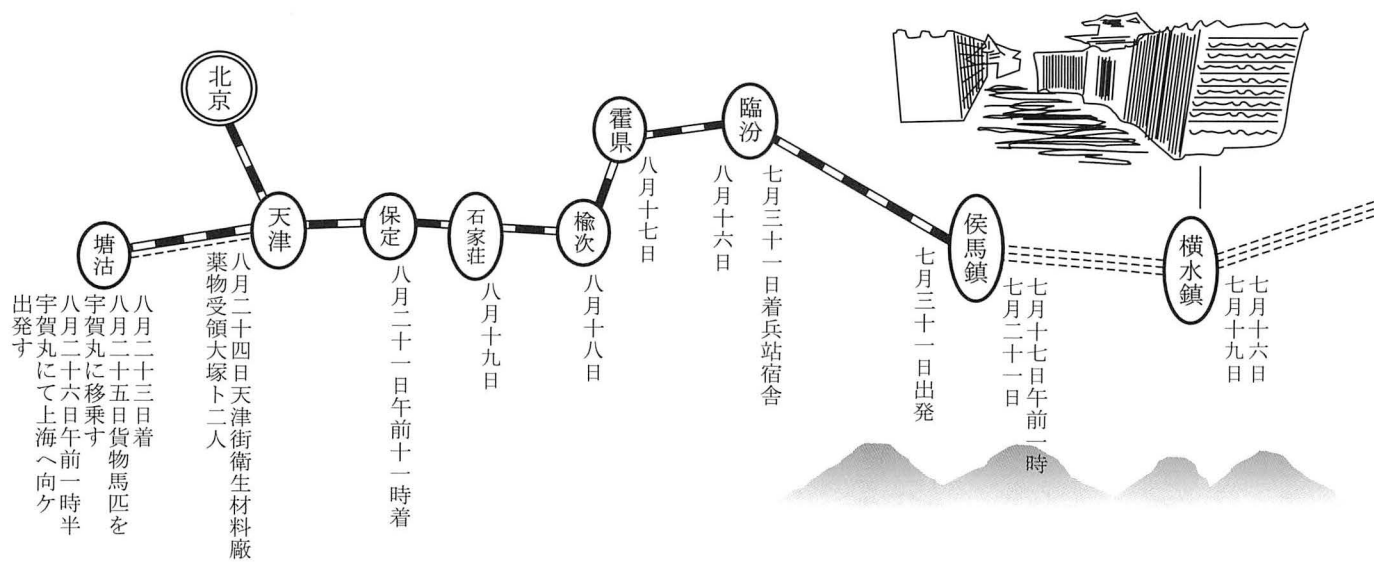
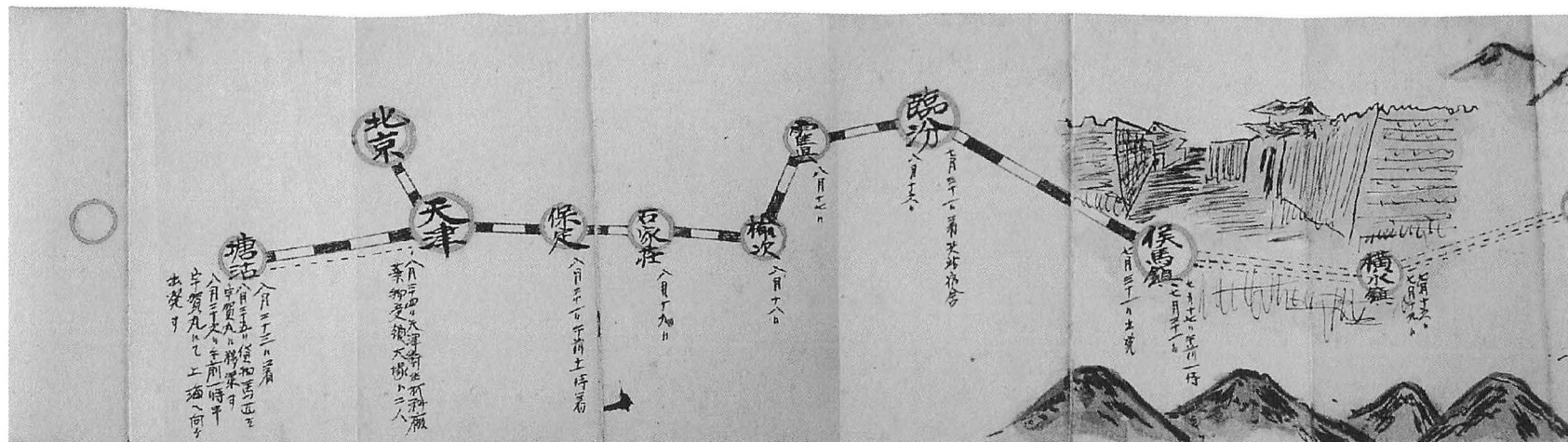
晋南肃清戦

昭和十三年六月十九日出発（榆次）











日支事変從軍記録
 中支派遣軍乙集團兵站部
 大野部隊醫務室
 衛生伍長 甘井 清務
 (中支の部) 北支より移動

昭和十二年九月より同十三年八月二十五迄 河北省
 山西省の各攻略戦に参加 十三年八月二十一日
 塘沽港出發 中支上海より上航南昌 及武
 漢三鎮 攻略戦に参加

一、昭和十三年十月五日 任衛生伍長
 一、勲七等青色銅葉章 賜フ (昭和十五年
 一、金参百五拾円 (四月二十九日付)
 一、凱旋 昭和十四年二月二十八日

日支事変從軍記録
 中支派遣軍乙集團兵站部
 大野部隊醫務室
 衛生伍長 甘井 清務
 (中支の部) 北支より移動

昭和十二年九月より同十三年八月二十五日迄 河北省
 山西省の各攻略戦に参加 十三年八月二十六日
 塘沽港出發 中支上海より上航南昌、及武
 漢三鎮 攻略戦に参加

一、昭和十三年十月十二日 任衛生伍長
 一、勲七等青色銅葉章 賜フ (昭和十五年
 一、金参百五拾円 (四月二十九日付)
 一、凱旋 昭和十四年二月二十八日



塘沽 八月二十三日着
暫く振入浴

八月二十四日大塚君と
天津衛生材料廠へ
八月二十五日発

本船乗替

八月二十五日宇賀丸に
馬匹貨物移乗
八月二十六日午前
一時半出帆

大連

八月二十七日
大連沖通過

上海 飯田棧橋

八月二十八日
上海ウーソン沖
灯台前停泊
八月三十日出航
上航

南京

九月一日十時着
貨物御用船番号
八〇〇以上のものあり
支那沿岸の船舶
日本の船大小五千
有り
と云ふ

九月二日出航
上航す

蕪湖

九月二日午後三時着
九月三日発



右岸より敵山砲
射撃右舷に
命中中村即死
重体二輕五海風駆逐隊
より軍医来り
手当す

安慶

九月四日午後二時着
戦死告別式

九江

九月五日午後六時着
九月六日上陸
松山伴部隊野中保市氏に
三内出身久尾
出逢い話した
九月九日出発

外人別荘地

九月十日一六師団に
八月十日五七五七
送沙河上陸

沙河

九月九日着

廬山

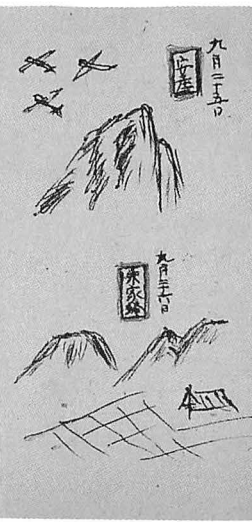
外人別荘地

九江
九月五日午後六時着
九月六日上陸
松山伴部隊野中保市氏に三内出身久尾
出逢い話した
九月九日出発

安慶
九月四日午後二時着
戦死告別式

右岸より敵山砲
射撃右舷に
命中中村即死
重体二輕五海風駆逐隊
より軍医来り
手当す

外人野村



九月十日一〇六師団に配属
九月十一日ヨリ二十五日まで糧食弾薬輸
送ス沙河を基地として

ラクダ山 — 十里山 — 黄老門

九月二十五日
沙河出發

九月二十五日
安庄

九月二十六日
朱家

九月二十七日
勦下陳

鶏公山

暑さに馬
次々に斃る
暗夜にて前進
不能豪雨
十一時露宮

兵はマラリヤ
腸疾患

九月二十九日

昨夜一食セズ豪雨暗夜の行軍
前進不能外套を被り濡れ乍ら
寝る

彈丸音

泥土臍ヲ没す

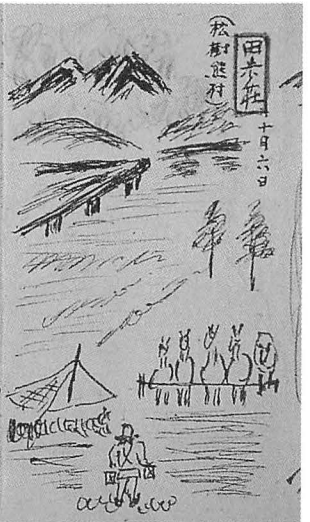
大平藍

九月三十日

王家范王
泥人形の
寝る

十月一日

粉を微発白で
摺って米にす



田歩莊 十月六日
松樹熊村



自十月六日 大激戦地
至十月十七日

田歩莊 十月六日
(松樹熊村)

自十月六日 大激戦地
至十月十七日

雷鳴

● 我大野部隊の死傷
百十数名

飛行機より食糧投下

十月七日 迫撃砲十数発馬繁場落下馬十数頭斃る
負傷兵数名あり自営隊組織周囲の山を
占領し警備につく

十月八日 二班宮崎二等兵右肩肺貫通銃創
敵増強苦戦
糧秣全く決亡支那モミ鉄カブトで搦り
飯を凌ぐ

十月九日 敵襲来敵回手榴弾を投げ込む我軍損害
甚だし我が大野部隊だけでも一〇〇名を超ゆ
輻重聯隊瀬川隊と共松樹熊村を死守す
夜明より激戦続く幾度か高地を奪取され
苦戦続く

十月十日 夜間十時頃透明筒を揚げ未方飛行機二機
来り敵を爆撃す敵全く沈黙せり
約十日振り安眠す
初を集め鉄カブトで搦り余り腹が空いた
関係か初カラを吹くと眠舞を感ず
患者及戦死者の整理

十月十一日 患者療養所の患者の治療す
十月十四日 初搗米を拵らへ粥食乍ら三食喫し久方振り満腹
十月十六日 二十二班山下昏睡状態カンフル、ゲキタミン注射
十月十七日

十月七日 迫撃砲十数発馬繁場落下馬十数頭斃る
負傷兵数名あり自営隊組織周囲の山を
占領し警備につく

十月八日 二班宮崎二等兵右肩肺貫通銃創
敵増強苦戦
糧秣全く決亡支那モミ鉄カブトで搦り
飯を凌ぐ

十月九日 敵襲来敵回手榴弾を投げ込む我軍損害
甚だし我が大野部隊だけでも一〇〇名を超ゆ
輻重聯隊瀬川隊と共松樹熊村を死守す
夜明より激戦続く幾度か高地を奪取され
苦戦続く

十月十日 夜間十時頃透明筒を揚げ未方飛行機二機
来り敵を爆撃す敵全く沈黙せり
約十日振り安眠す
初を集め鉄カブトで搦り余り腹が空いた
関係か初カラを吹くと眠舞を感ず
患者及戦死者の整理

十月十一日 患者療養所の患者の治療す
十月十四日 初搗米を拵らへ粥食乍ら三食喫し久方振り満腹
十月十六日 二十二班山下昏睡状態カンフル、ゲキタミン注射
十月十七日



十月十八日患者輸送
約一〇〇名一〇六師団
寒い夜空にも
一枚で

うめいて
みる毎朝
担架の俵
五、六名死亡している

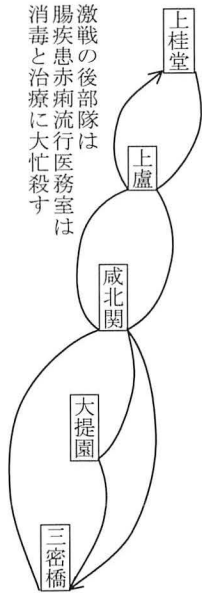
咸北関
十月二十一日

上盧
十月二十一日

十二月九日出発瑞昌

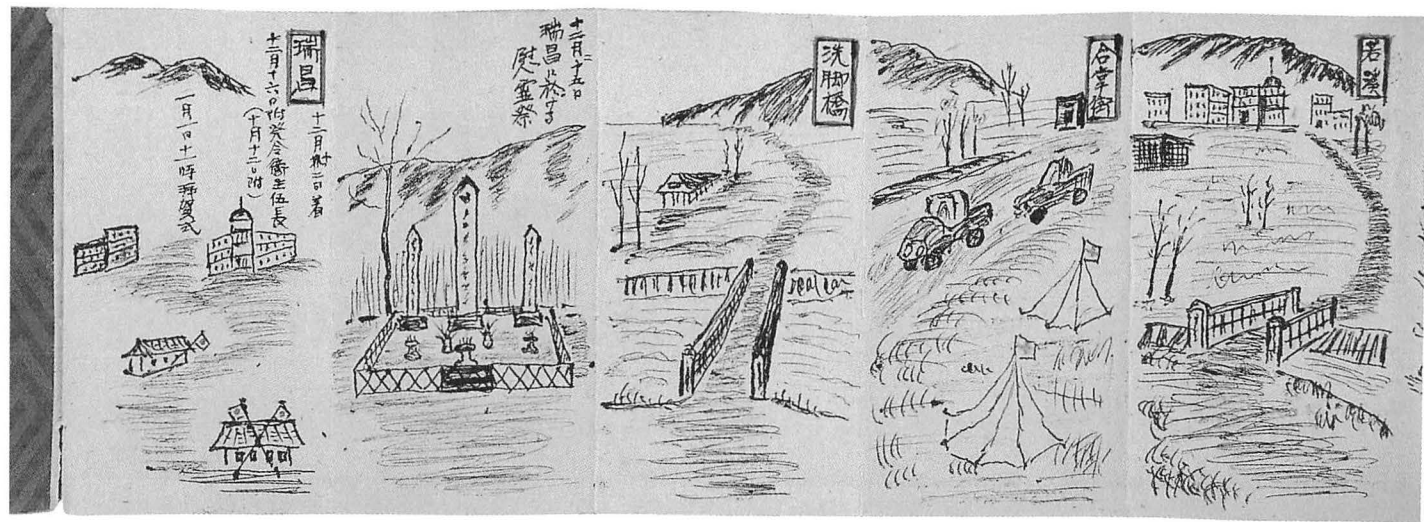
上桂堂
十月二十一日着
十月二十四日
岡本伍長以下
三十五柱
慰霊祭

上桂堂に駐留して
十月二十五日より本隊は輸送業務十二月九日まで続く



激戦の後部隊は
腸疾患赤痢流行医務室は
消毒と治療に大忙殺す

大堤園
明治節
十一月十日



若溪

合掌街

洗脚橋

十二月十五日
瑞昌に於ける
慰霊祭

十二月二日
瑞昌

十二月十六日
衛生会衛生伍長
發令
(十月十二日付)
一月一日十一時再賀式

若溪

合掌街

洗脚橋

十二月二十五日
瑞昌に於ける
慰霊祭

十二月十二日
瑞昌

十二月十六日
衛生会衛生伍長
發令
(十月十二日付)
一月一日十一時再賀式

昭和十三年十二月十日 桂堂出衆

十二月十日 大屋田村宿營

十二月十日 塚家鋪宿營

十二月十一日 瑞昌着

十二月十一日 任衛生伍長(本月十二日附)

昭和十四年一月一日 時聯隊拜賀式

一月十六日 交代衛生兵五名 瑞昌着

一月二十八日 申送り

一月三十日 瑞昌より九江へ出発

一月三十一日 大衆丸にて九江に出帆 二月一日 時漢口着

武昌に渡り 湯原部隊兵站宿舎泊り

二月二日 岡本部隊藤井部隊を訪れ 高須賀秀吉氏

永井宇平氏に面会話した夕方吉野部隊へ行

き為 数道三君に面会 大塚君と二人で同所

へ 宿泊会談した

二月三日 漢口へ亘り中山公園見物午後三時大衆丸にて

出発

二月四日 午後三時九江上陸

二月五日 午前十一時瑞昌帰着午後六時より

医務室に於て送別式

二月六日 岩切聯隊へ帰還申告午後六時より中隊

將校下士官の送別会を開く

二月七日 中隊全員七〇〇名 螢の光愛國行進曲で

見送りを受ける 午後九時九江着

矢野義則 古林英一 吉岡朝市 三名に

面会午後五時ときわ丸乗船

安慶二月九日 博洋丸乗船泊り

二月十日 午後六時 撫湖着 碇泊

二月十一日 午前八時 発十一時 十分 南京着

日本大、小船泊軍艦紀元節にて 満艦色

零時半上陸バスにて 市内見物 中山陵

を見る

二月十二日 八時二十五分 南京発列車で 午後四時十五分

上海到着

二月十三日 十五日 十六日 上海にて 市内見物 買物

乗船手続等

二月十七日 鉄道棧橋に到り 憲兵隊の私物検査

午後十時より 乗船 天平丸六〇〇〇頃 乗組

約三百名と共に 病院衛生部看護婦

多数の見送りを 受け 船中泊り

二月十八日 航海中

旧正月元旦 快晴 午前十時 老岐、対馬

を見る 午後三時 関門海峡 通過 初め

て 見る 日本 景色 各船泊り 国旗を

打振り 迎えて 呉れる 又日曜日 小学生

や 潮干狩の子供が 小さい手を 打振り

迎えて 呉れる 感極まる 又今朝 宇品

を出発したら 多い多数の出征兵士を

乗せた船とすれ違いに 過ぎ去って

行く

二月十九日 旧正月元旦 快晴 午前十時 伊波新島

を見る 午後三時 関門海峡 通過 初め

て 見る 日本 景色 各船泊り 国旗を

打振り 迎えて 呉れる 又日曜日 小学生

や 潮干狩の子供が 小さい手を 打振り

迎えて 呉れる 感極まる 又今朝 宇品

を出発したら 多い多数の出征兵士を

乗せた船とすれ違いに 過ぎ去って

行く

昭和十三年十二月十日 上桂堂出衆

十二月十日 大屋田村宿營

十二月十一日 家舗宿營

十二月十二日 瑞昌着

十二月十六日 任衛生伍長

昭和十四年一月一日 時聯隊拜賀式

一月二十六日 交代衛生兵五名 瑞昌着

一月二十八日 申送り

一月三十日 瑞昌より九江へ出発

一月三十一日 大衆丸にて九江に出帆 二月一日 十一時 漢口着

武昌に渡り 湯原部隊兵站宿舎泊り

二月二日 岡本部隊藤井部隊を訪れ 高須賀秀吉氏

永井宇平氏に面会話した夕方吉野部隊へ行

き為 数道三君に面会 大塚君と二人で同所

へ 宿泊会談した

二月三日 漢口へ亘り中山公園見物午後三時大衆丸にて

出発

二月四日 午後三時九江上陸

二月五日 午前十一時瑞昌帰着午後六時より

医務室に於て送別式

二月六日 岩切聯隊へ帰還申告午後六時より中隊

將校下士官の送別会を開く

二月七日 中隊全員七〇〇名 螢の光愛國行進曲で

見送りを受ける 午後九時九江着

矢野義則 古林英一 吉岡朝市 三名に

面会午後五時ときわ丸乗船

安慶二月九日 博洋丸乗船泊り

二月十日 午後六時 撫湖着 碇泊

二月十一日 午前八時 発十一時 十分 南京着

日本大、小船泊軍艦紀元節にて 満艦色

零時半上陸バスにて 市内見物 中山陵

を見る

二月十二日 八時二十五分 南京発列車で 午後四時十五分

上海到着

二月十三日 十五日 十六日 上海にて 市内見物 買物

乗船手続等

二月十七日 鉄道棧橋に到り 憲兵隊の私物検査

午後十時より 乗船 天平丸六〇〇〇頃 乗組

約三百名と共に 病院衛生部看護婦

多数の見送りを 受け 船中泊り

二月十八日 航海中

旧正月元旦 快晴 午前十時 老岐、対馬

を見る 午後三時 関門海峡 通過 初め

て 見る 日本 景色 各船泊り 国旗を

打振り 迎えて 呉れる 又日曜日 小学生

や 潮干狩の子供が 小さい手を 打振り

迎えて 呉れる 感極まる 又今朝 宇品

を出発したら 多い多数の出征兵士を

乗せた船とすれ違いに 過ぎ去って

行く

二月十九日 旧正月元旦 快晴 午前十時 伊波新島

を見る 午後三時 関門海峡 通過 初め

て 見る 日本 景色 各船泊り 国旗を

打振り 迎えて 呉れる 又日曜日 小学生

や 潮干狩の子供が 小さい手を 打振り

迎えて 呉れる 感極まる 又今朝 宇品

を出発したら 多い多数の出征兵士を

乗せた船とすれ違いに 過ぎ去って

行く

二月二十日 午前三時似島沖着投錨

二月二十一日 船中にて臨検又検査船に
移乗消毒等船中泊り

二月二十三日 午前九時より上陸十時より各種団体の
出迎を受け運輸部前の上陸税関

憲兵の点検を受けり広島大手町
松本旅館にて休養

二月二十五日 廣島港午前零時十分發列車で
岡山經由宇野より連絡船午前

七時三十分上陸四国第一歩
七時四十分高松發列車午前八時四十分

善通寺着学生国防婦人会各種団体の
出迎へを受け午前九時十分山砲隊

第五中隊に凱旋す

二月二十八日 除隊親戚部落の方々にお迎へを
受け午後八時過ぎ帰宅した

二月二十日

午前三時似島沖着投錨
二十一日二十二日船中にて臨検又検査船に
移乗消毒等船中泊り

二月二十三日

午前九時より上陸十時より各種団体の
出迎を受け運輸部前の上陸税関
憲兵の点検を受けり広島大手町
松本旅館にて休養

二月二十四日

広島駅午前零時十分發列車で
岡山經由宇野より連絡船午前
七時三十分上陸四国第一歩

七時四十分高松發列車午前八時四十分
善通寺着学生国防婦人会各種団体の
出迎へを受け午前九時十分山砲隊

第五中隊に凱旋す

二月二十八日

除隊 親戚部落の方々のお迎へを
受け午後八時過ぎ帰宅した



故 甘井 清務 氏



甘井氏の生家近望（2007年9月）

甘井清務氏の略歴とその功績の一部を紹介します。

甘井氏は当時の三内村井内甲一一八一番地の旧家に、明治三十六年十月二十五日生誕。幼少時代より、その天稟てんびんの片鱗が窺へられて長じて優良青年として表彰を受けられた。

大正十三年一月現役兵として入営、看護学を修得して大正十四年七月満期除隊して帰郷後、大正十五年台湾総督府巡查を拝命、昭和八年依願退職されたが、在職中は警察任務の外経験を生かして現地の保健医療に従事し、現地住民の信望厚く治安と医療の両面で活躍されたと聞く。（氏の人望を垣間見た思いがする）

帰郷後、家を新築し、三内産業組合書記（現農協）、森林組合役員、川内町議三期、日赤奉仕団長、老人会長などを歴任した。なお氏は資性温厚にして、地域開発にも貢献し、川東奥地林道開発時には、事務に精通していたため、地元会計責任者となり、現在の県道二百十号線及び、梅ヶ谷林道、井内峠線の完通に盡力した。高齢者叙勲により、勲六等瑞宝章（地方自治功労賞）の恩命に浴す。平成八年十二月十七日没。享年九十三歳。

『北支従軍図記』
『中支従軍図記』
における
甘井清務氏の転戦地

S12・9・27 ~ S13・6・19
保定・石家荘・太原方面
侵攻に従軍 (図Ⅰ)

S13・6・19 ~ 8・23
晋南肅清戦に従軍 (図Ⅱ)

S13・8・26 ~ S14・1・28
武漢攻略戦に従軍 (図Ⅲ)

S12・9・27
午前6:00

S12・9・26
午後7:00

S12・9・26

S12・9・22
午後8:00船泊
9・25午後8:00出発

S12・9・21
午後5:00
坂出港出発

S12・9・20
午後8:00
普通寺出発

S12・8・27
午前5:00
自宅出発

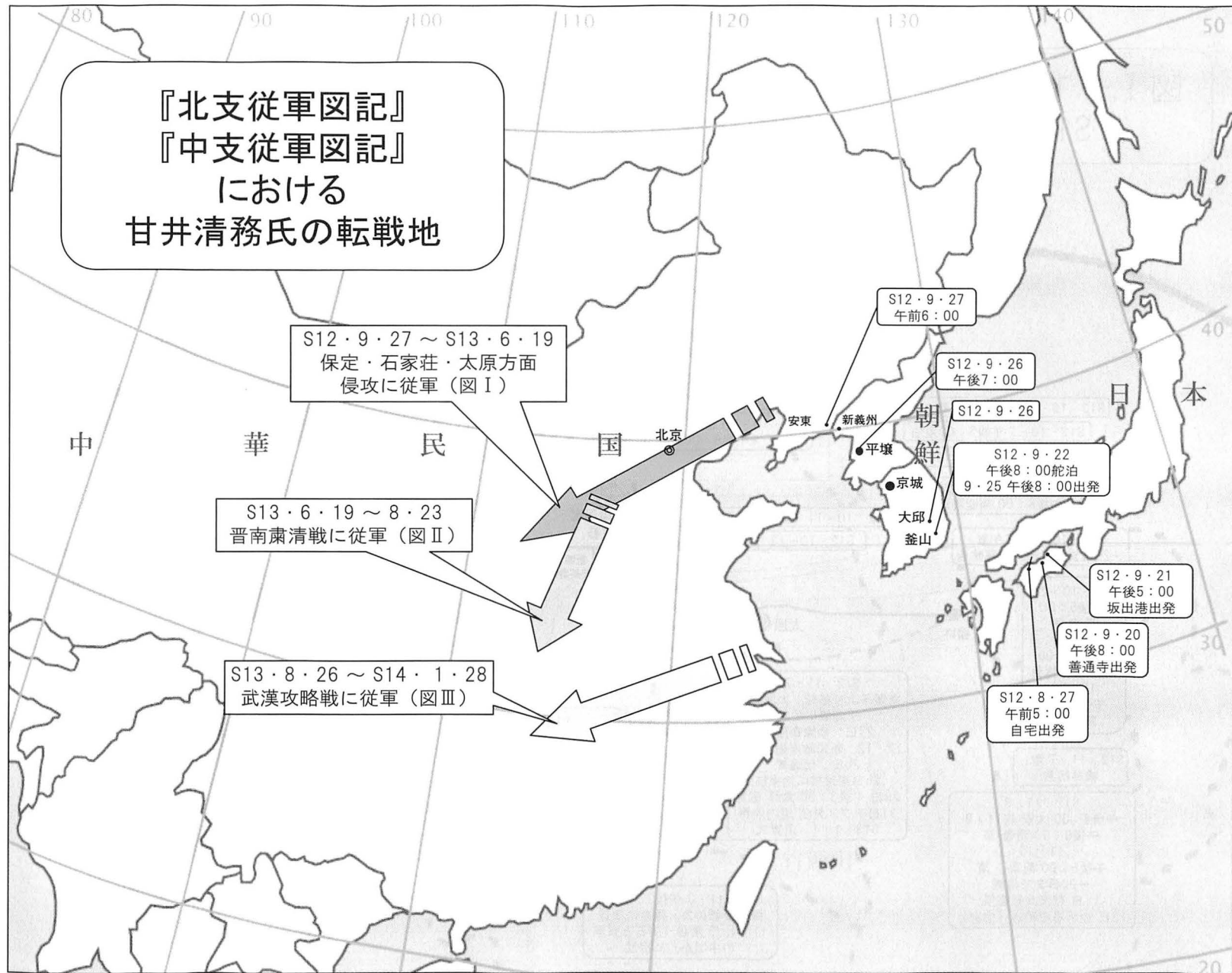


図 I - 1 保定・太原・榆次方面侵攻①
(S12・9・27 ~ S13・1・1)

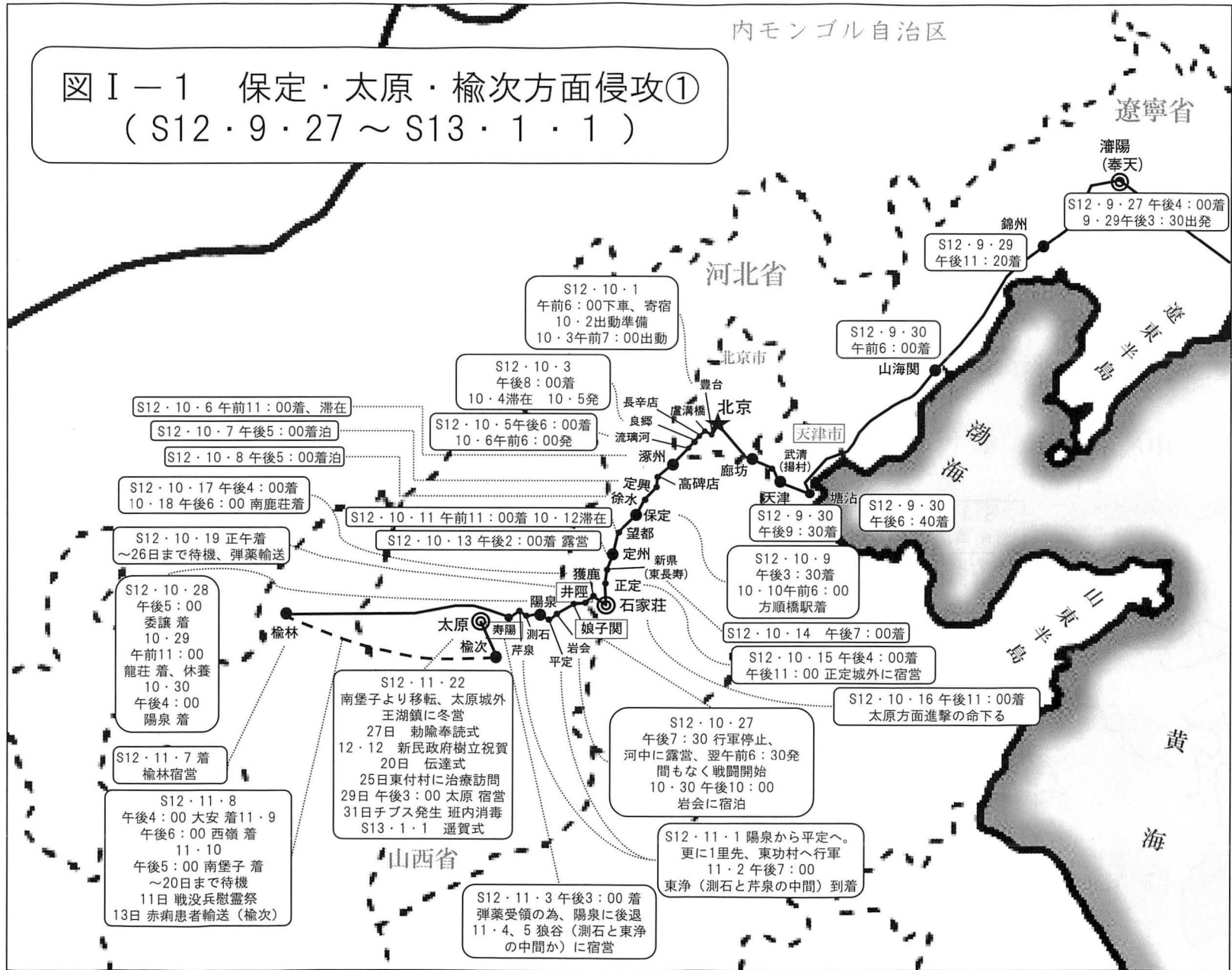
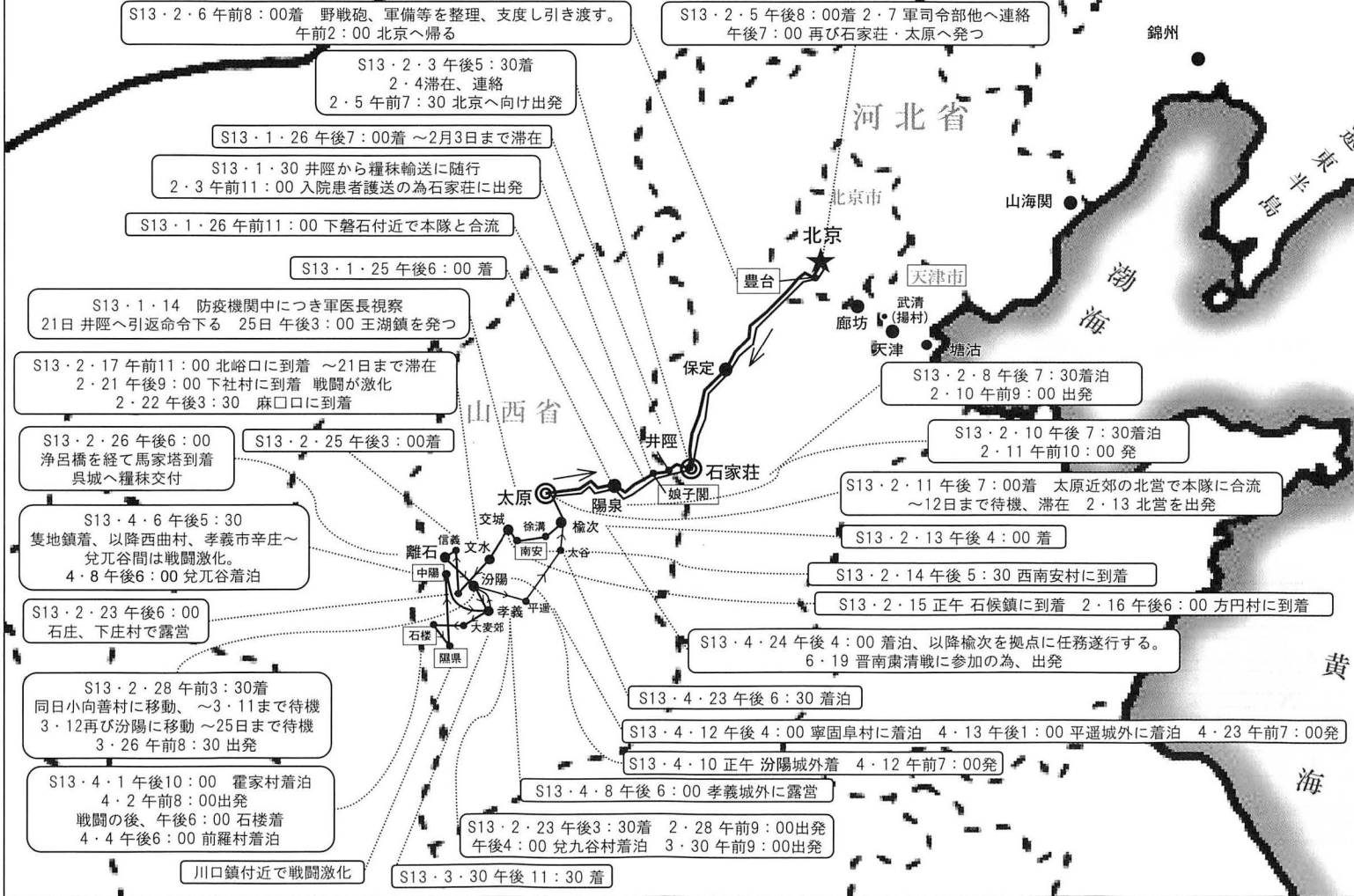
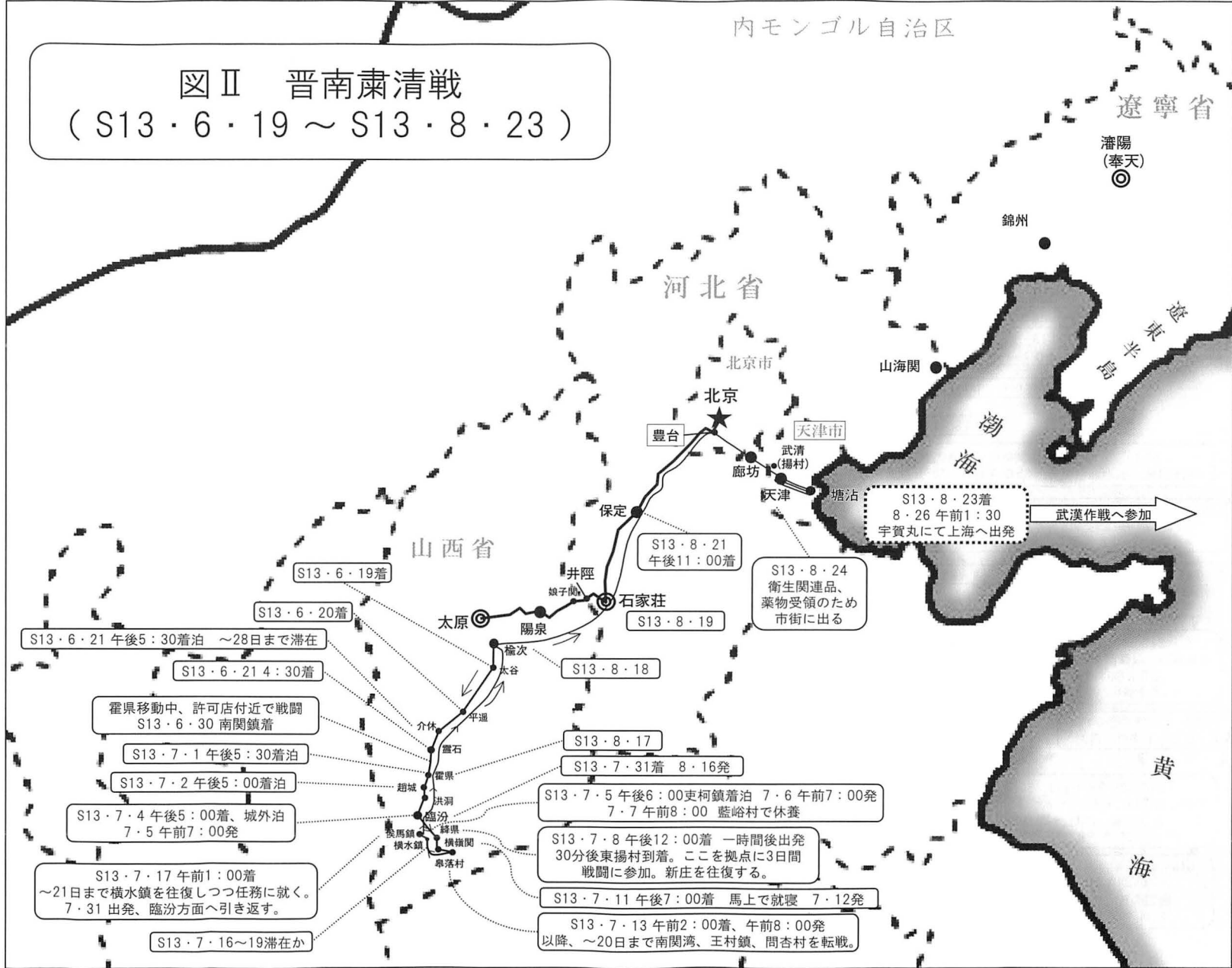


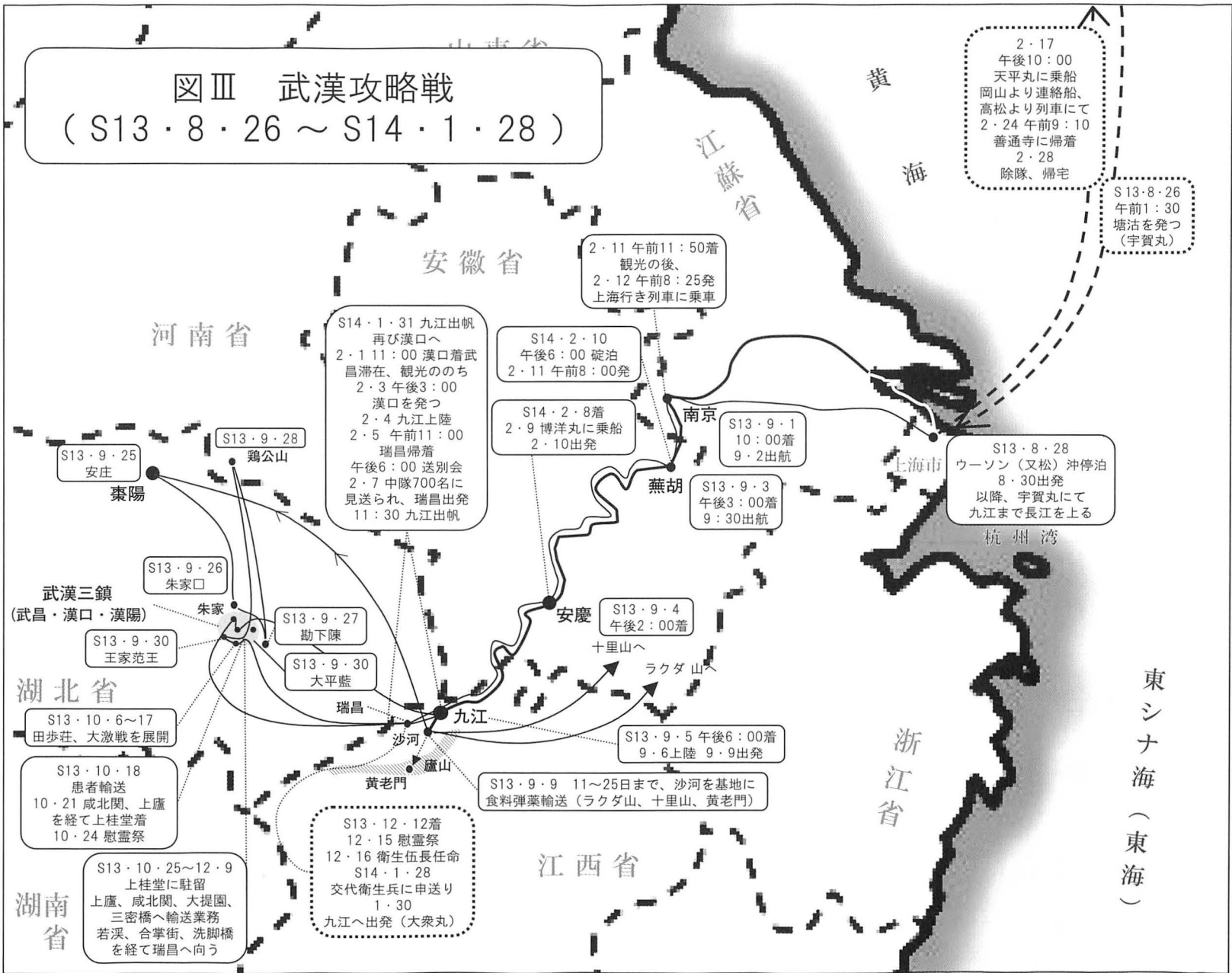
図 I - 2 保定・太原・榆次方面侵攻② (S13・1・13 ~ S13・6・19)



図Ⅱ 晋南肅清戦
(S13・6・19 ~ S13・8・23)



図Ⅲ 武漢攻略戦 (S13・8・26 ~ S14・1・28)



2・17
午後10:00
天平丸に乗船
岡山より連絡船、
高松より列車にて
2・24午前9:10
普通寺に帰着
2・28
除隊、帰宅

S13・8・26
午前1:30
塘沽を発つ
(宇賀丸)

2・11午前11:50着
観光の後、
2・12午前8:25発
上海行き列車に乗車

S14・1・31九江出帆
再び漢口へ
2・111:00漢口着武
昌滞在、観光のち
2・3午後3:00
漢口を發つ
2・4九江上陸
2・5午前11:00
瑞昌帰着
午後6:00送別会
2・7中隊700名に
見送られ、瑞昌出帆
11:30九江出帆

S14・2・10
午後6:00碓泊
2・11午前8:00発

S14・2・8着
2・9博洋丸に乗船
2・10出帆

S13・9・1
10:00着
9・2出航

S13・9・3
午後3:00着
9:30出航

S13・8・28
ウーソン(又松)沖停泊
8:30出帆
以降、宇賀丸にて
九江まで長江を上る

S13・9・25
安庄
棗陽

S13・9・28
鶏公山

S13・9・26
朱家口
武漢三鎮
(武昌・漢口・漢陽)

S13・9・27
勘下陳

S13・9・30
王家范王

S13・9・30
大平藍

S13・9・4
午後2:00着
十里山へ

ラクダ山へ

S13・9・5午後6:00着
9・6上陸 9・9出帆

S13・9・9 11~25日まで、沙河を基地に
食料彈薬輸送(ラクダ山、十里山、黄老門)

S13・10・6~17
田歩荘、大激戦を展開

S13・10・18
患者輸送
10・21咸北関、上廬
を経て上桂堂着
10・24慰靈祭

S13・10・25~12・9
上桂堂に駐留
上廬、咸北関、大堤園、
三密橋へ輸送業務
若溪、合掌街、洗脚橋
を経て瑞昌へ向う

S13・12・12着
12・15慰靈祭
12・16衛生伍長任命
S14・1・28
交代衛生兵に申送り
1・30
九江へ出帆(大衆丸)

東シナ海(東海)



井内の浄瑠璃と佐和利のこと

「歌は世につれ、世は歌につれ」の書出に初まる旧川内老人クラブ連合会編「ふる里の記録」の一節に、我が井内の「大根本口に小梶太夫がいた。本名を東末次と呼び若い頃から大阪で修行し帰ってからは、阿波源之丞に加わり、専属太夫として関西各地を廻るといふ全くのプロである。初めは梶登太夫と名乗っていたが、後に師匠の名を継ぎ三代小梶太夫と改める。透き通る大きな声で「伊勢音頭油屋の段」とか、「嬢景清日向島の段」を得意とし、また多くの弟子を育てた」と記されている。

川内町誌人物小伝にも記述あり、晩年には素人浄瑠璃の師匠として、浄瑠璃愛好家を指導したとされる。

明治中期より、大正昭和初期までは素人浄瑠璃が各地で盛んに語られたと聞く。我が井内においても、小梶太夫の存在が地方愛好者にとつて好条件であり、多々の語手が育ったとのことである。

我或る親族の会合にて、久し振りの顔合せと、心易さもあり話も弾み雑談している間に、その家の先代が浄瑠璃好きで、師匠を家に住込ませて稽古する懲りようであった。

隣人組中の者も毎夜のように練習した事などに話が移り、当主が祖父の語った浄瑠璃本等を、座に持出した中に佐和利集なる一冊があり、我も臆気な記憶があり借受けて持帰ったものの、浄瑠璃本はさっぱり読めず、然し何とかならないものかと思ひ、永田栄新 東温市立歴史民俗資料館長(当時)に依頼した処、数日後に指導を受けて解読することが出来た別紙三題である。佐和利とは、「広辞苑」によれば「義太夫節以外の節を取入れた箇所、転じて曲中で最も聴き処とされてゐる部分、……」と記されており、井内の小梶太夫のことと重ね合せ、「井内むかし話」の一編に加えた。

当時は勿論テレビ、ラジオなどもなく、農村歌舞伎、人形芝居など観る事も稀であり、青壮年若者たちの唯一の娯楽であったと思われる。以下別紙とした、佐和利の三編を紹介しよう。前段の解説文については下坂憲子学芸員の寄稿を戴いた。

佐和利集

『新版歌祭文』

安永九（一七八〇）年初演。

作／近松半二はんじ

上下二卷（上座摩社の段、野崎村の段）

（下長町の段、油屋の段）

宝永五（一七〇八）年正月に起こった心中事件を題材にした人形浄瑠璃。和泉の武士・相良丈夫の遺児久松と油屋の娘お染の悲恋を主軸に、複雑に織り交ぜられた人間関係の悲哀を描いた「お染久松物」の代表作として人気の高い作品。とりわけ上巻「野崎村の段」は最も優れており、歌舞伎でも多く演じられている。

『野崎村の段』

（前段の梗概）父の死後、乳母の兄・久作に養育された久松は、油屋の丁稚となるが、同僚の下人・小助の奸計に陥り、店の金を騙し取られてしまう。

店を追われ、小助とともに野崎村に帰郷した久松。養父・久作は脅す小助に金を渡して帰し、妻の連れ子・お光と夫婦になることを勧める。しかし、さっそく婚礼の支度を整えるお光のもとへ、久松を追ってきたお染が現れる。お染の手前、お光を隠した久松へ縋り付いて懇願するお染。その言葉に心中を決意するお染久松。養父の説得にも揺るがず、密かに覚悟を固めた二人の心を知ったお光は尼となる。その姿に悲嘆に暮れる一同。お染を追って来た油屋の後家・お勝もお光の犠牲に感激し、久松とお染を連れ帰ることにする。久作親子が見守るなか、世間をはばかりる二人は、それぞれ駕籠と舟で江戸に旅立つのであった。

※『佐和利集』収録部分は、久松を追って来たお染の台詞部分である。

新版歌祭野崎村之段

その間おそしと欠入るお

染逢たかつたと久松

に縫り付ばアコレ聲が高

ふこざります思ひかけ

ない此所へはどふして訳を

かひひあひまほして訳を

聞してくと問れて漸

顔を上訳はそつちに

覚へが有ふわしが事は思

ひ切山家屋へ嫁入せ

ひ切山家屋へ嫁入せ

いとのこしておきやつた
 いまのじとあまのり
コレ此文そなたは思ひ切
 けび文そかといふひ切
氣でもわしやなんほで
 氣とまうあかんか
も得切らぬあんまり逢
 ち均切らぬわんまう逢
たさなつかしさ勿躰な
 ことかたりしとぬ祥か
い事ながら観音様をか
 ころかろ観音様か
こつけて逢に來たやら
 ころけて逢ふ來しや
南や知らぬ在所もいと
 南や知らぬ在所もいと
いはせぬ二人一所に添
 いはせぬ二人一所に添
ふならまも炊ふしおり
 ふならまも炊ふしおり

<p>是るいさふかりげ</p>	<p>振のたまもとに北時雨は <small>れ間</small>はさら<small>に</small>なかりけり</p>	<p>りとのいけれゆふせんの</p>	<p>らみのたけをゆふせんの <small>は</small>み<small>の</small>たけ<small>を</small>ゆふ<small>せ</small>ん<small>の</small></p>	<p>いゆぬりの桐飲さら <small>は</small>間ぬ<small>は</small>いの<small>の</small>胸欲<small>と</small>う</p>	<p>ふ物女の道をそむけと <small>ふ</small>物<small>女</small>の<small>道</small>を<small>そ</small>む<small>け</small>と</p>	<p>つむぎどんな貧しい暮 <small>つ</small>む<small>ぎ</small>ど<small>ん</small>な<small>貧</small>しい<small>暮</small></p>
-----------------	---	--------------------	--	---	--	--

新版歌祭 野崎村之段

その間おそしと欠入るお

染逢たかつたと久松

に縫り付ばアコレ聲が高

ふござります思ひがけ

ない此所へはどふして訳を

聞してくと問れて漸

顔を上訳はそつちに

覚へが有ふわしが事は思

ひ切山家屋へ嫁入せ

いとのこしておきやつた

コレ此文そなたは思ひ切

気でもわしやなんぼで

も得切らぬあんまり逢

たさなつかしき勿躰な

い事ながら観音様をか

こつけて逢に来たやら

南やら知らぬ在所もいと

いはせぬ二人一所に添

ふならまも炊ふしおり

つむぎどんな貧しい暮

でもわしや嬉しいと思

ふ物女の道をそむけとは

聞ぬはいの胴欲とう

らみのたけをゆふせん

振のたもとに北時雨は

れ間はさらになかりけり

新版歌祭文 野崎村の段

その間遅しとかけ入るお

染「逢いたかった」と久松

に縫り付けば、(久松)「アアコレ声が高

うござります。思いがけ

ないここへはどうして、訳を

聞かしてくと」と。(お染)問れて漸く

顔を上げ、「訳はそつちに

覚えが有ろう。『わしが事は思

い切り、山家屋に嫁入りせ

い』と、(久松が)残して置きやつた

コレこの文、そなたは思ひ切る

気でも、わしやなんぼで

も得切らぬ。あんまり逢い

たさなつかしき、勿体な

い事ながら観音様をか

こつけて、逢いに来たやら

南やら、知らぬ在所も厭

いはせぬ。二人一所に添

うなら飯も炊こうし、織り

紡ぎ、どんな貧しい暮らし

でも、わしや、嬉しいと思

うもの。女の道を背けとは、

聞えぬわいの胴欲」と、恨

みのたけを友禪の、

振りの袂に北時雨、晴

れ間はさらになかりけり。

『かななでほんちゆうしんぐら仮名手本忠臣蔵』

寛延元（一七四七）年初演。

作／竹田出雲・三好松洛しょうらく・並木千柳なみきせんりゆうの合作。十一段。

- | | | | | | |
|----|-------|----|---------|-----|-------|
| 第一 | 鶴岡の饗応 | 第二 | 諫言の寝刃 | 第三 | 恋歌の意趣 |
| 第四 | 来世の忠義 | 第五 | 恩愛の二玉 | 第六 | 財布の連判 |
| 第七 | 大臣の鎗刀 | 第八 | 道行旅路の嫁入 | | |
| 第九 | 山科の雪転 | 第十 | 発足の櫛笄 | 第十一 | 合印の忍兜 |

元禄十四（一七〇一）年三月十四日、江戸城本丸松の廊下での刃傷事件、元禄一六（一七〇三）年十二月十四日深夜、赤穂浪士による吉良上野介の仇討ちを題材にした人形浄瑠璃。いわゆる「忠臣蔵物」の代表作で、『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』とともに、浄瑠璃の三大名作として数えられる。『仮名手本』では、物語の舞台を室町（南北朝）時代に設定し、浅野内匠頭と吉良上野介を『太平記』の塩谷判官と高師直に置き換え、塩谷判官の妻・顔世御前をめぐる横恋慕のエピソードを刃傷沙汰にいたる遺恨として設定している。創作の部分も多いが、塩谷家の国家老・大星由良之助のモデルが大石内蔵助など、実在の人物や風聞、逸話をおおいに取り込んで描かれている。

『山科いんか隠家の段（山科閑居の場、山科の雪転ゆせきかなど）』

（前段の梗概）大星由良之助の子息・力弥と加古川本蔵の娘・小浪は許婚の間柄。しかし足利城松の間での刃傷事件以来、両家の関係は断絶同然となってしまふ。由良之助にとって、高師直に斬りかかると塩谷判官を止めた本蔵は、今や本懐を遂げられなかった主君の敵となったのである。もとより相思相愛の力弥と小浪。娘を思う後妻の戸無瀬は、主人の刀を携え、加古川家の代理として、大星親子に見えるべく小浪とともに旅立つ。

雪の中、大星家に辿り着いた戸無瀬と小浪。戸無瀬は、由良之助の妻・お石に力弥との祝言を頼むものの、「金銭で師直に取り入る本蔵の娘など嫁にできない」と拒絶される。夫に申し訳が立たない戸無瀬は、娘ともども自害しようとするが、三方を携えて現れたお石に止められる。無慈悲にも、お石は戸無瀬に「この上に本蔵の首を載せたら祝言を認めよう」と言い放つ。無理難題を突きつけられ、途方に暮れる戸無瀬。するとその前に、虚無僧に身をやつした本蔵が現れ、お石に向かって大星親子を罵倒する。怒ったお石は槍を手に本蔵に打ちかかるが、たちまちに組み敷かれてしまう。すると奥から力弥が現れて、槍で本蔵を突く。さらに、止めを刺そうとする力弥を制し、「さぞ本望でござろう」と本蔵に声をかけ、由良之助がついに姿を現す。本蔵は小浪の祝言のために、力弥にあえて自らを討たせたのである。娘を思う本蔵の心意気を理解した由良之助は、瀕死の本蔵に雪で作った二つの五輪塔を見せ、決死の覚悟での討ち入りを告白する。喜んだ本蔵は、高師直邸の見取図を由良之助に託し息を引き取る。由良之助は本蔵の虚無僧の装束を身にまとい、堺を目指し旅立つのであった。

※『佐和利集』収録部分は、お石の拒絶の言葉を受け「他に嫁入りする気はないか。」と尋ねた、戸無瀬に対する小浪の台詞です。

仮名 手本 忠 臣 藏 山科 隱家 九ノ段

假名手本忠臣藏 山科隱家九ノ段

アノ母様の胸慾な事お
アノ母様の胸欲からか

アノ母様の胸欲からか
アノ母様の胸欲からか

アノ母様の胸欲からか
アノ母様の胸欲からか

アノ母様の胸欲からか
アノ母様の胸欲からか

アノ母様の胸欲からか
アノ母様の胸欲からか

アノ母様の胸欲からか
アノ母様の胸欲からか

アノ母様の胸欲からか
アノ母様の胸欲からか

アノ母様の胸欲からか
アノ母様の胸欲からか

アノ母様の胸欲からか
アノ母様の胸欲からか

有 女 の 不 義 同 前 必

如 女 の 不 義 同 前 必

寢 覚 に も 殿 御 大 事
寢 覚 に も 殿 御 大 事

を 忘 る 由 良 之 助
を 忘 る 由 良 之 助

夫 婦 の 衆 へ 孝 行 尽 し
夫 婦 の 衆 へ 孝 行 尽 し

夫 婦 仲 睦 じ い 迎 あ じ
夫 婦 仲 睦 じ い 迎 あ じ

や ら に も 恪 気 ば し し
や ら に も 恪 気 ば し し

て 去 ら る 案 せ う か
て 去 ら る 案 せ う か

迎 隠 さ ず と 懐 妊 に
迎 隠 さ ず と 懐 妊 に

成 た ら 早 速 に 知 ら せ
成 た ら 早 速 に 知 ら せ

て く れ と お っ し や っ
て く れ と お っ し や っ

と 迎 せ ば 何 の 志 也
と 迎 せ ば 何 の 志 也

たをわたりしやくよふ
 覚へて居る去られて逝
 笑へて居る去られて逝
 けと、様に
 てまわらぬ者お昔のり
 けてどふいふてマハどふ云
 けとまわらぬ者お昔のり
 訳が有ふ共力弥様よ
 り外に余の殿御わし
 足外お飾の殿おは
 や否いやくと一筋に
 やおはるはくと一筋に
 恋を立抜心根を

仮名手本忠臣蔵 山科隠家九ノ段

アノ母様の胴慾な事お
つしやります国を出る
折と、様のおつしやつた
たは浪人仕ても大星
力弥行義といひ器量
と云仕合せな聾を取
た貞女両夫にまみ
へず譬夫に別れても
又の殿御を設なよ主
有女の不義同前必、
寢覚にも殿御大事
を忘るゝな由良之助
夫婦の衆へ孝行尽し
夫婦仲睦じい迎あじ
やらにも悋氣ばしし
て去らるゝな案せうか
迎隠さずと懷妊に
成たら早速に知らせ
てくれとおつしやつ
たをわたしやくよふ
覚へて居る去られて逝
でと、様に苦に苦をか
けてどふいふてマどふ云
訳が有ふ共力弥様よ
り外に余の殿御わし
や否いやくくと一筋に
恋を立抜心根を

仮名手本忠臣蔵 山科隠家九の段

(小浪)「アノ母様の胴慾な事お
つしやります。国を出る
折父様のおつしやつた
は、浪人しても大星
力弥。行儀といひ器量
といい、仕合せな聾を取
った。貞女両夫にまみ
えず。譬え夫に別れても、
又の殿御を設くなよ。主
有る女の不義同前、必ずく、
寢覚めにも殿御大事
を忘るるな。由良之助
夫婦の衆へ孝行尽くし、
夫婦仲睦まじいとて、あじ
やらにも悋氣ばしし
て去らるるな。案じようか
とて隠さずと、懷妊に
成ったら、早速に知らせ
てくれ」とおつしやつ
たを、わたしやくよう
覚えて居る。去られて逝
で、父様に苦に苦をか
けて、どういうて、マどう云い
訳が有ろうとも、力弥様よ
り外に、余の殿御、わしや
否いやくくと、
一筋に、恋を立て抜く心根を。

宝入舟松づくし

宝入舟 松づくし

豊なる歌
いはいは
やせや

御代の春
一本目には

池の松二本目には庭
池の松二本目には

の松三本目にはさがり松
の松三本目には

四本目には滋賀(志賀)の松
四本目には

五本目には五葉の松
五本目には

六つ昔は高砂やおのゑ
六つ昔は

の松やそねの松七ほん
の松やそねの松七ほん

めには姫こ松八本目
めには姫こ松八本目

には浜の松九つこ松を

かみ浪の松丸の右松

植ならべ十で豊国のの
植かへ十で豊国のの

伊勢の松此の松は最
伊勢の松此の松は最

上の松にて情有間の
上の松にて情有間の

松が枝のくどけばなび
松が枝のくどけばなび

く相生の松又いつく
く相生の松又いつく

の約束を日を待時待
の約束を日を待時待

くれを松連理の松か
くれを松連理の松か

契りを込め福大國は
契りを込め福大國は

満歳な目出たかりけ
満歳な目出たかりけ

る
次
第
也



宝入舟 松づくし

豊なる歌いはやせや

御代の春一本目には

池の松二本目には庭

の松三本目にはさがり松

四本目には滋賀の松

五本目には五葉の松

六つ昔は高砂やおのゑ

の松やそねの松七ほん

めには姫こ松八本目

には浜の松九つこ松を

植ならべ十で豊国の

伊勢の松此の松は最

上の松にて情有間の

松が枝のくどけばなび

く相生の松又いつく

の約束を日を待時待

暮を松連理の松に

契りを込め福大国は

満歳な目出たかりける

次第也

宝入舟 松尽くし

豊なる歌いはやせや

御代の春、一本目には

池の松、二本目には庭

の松、三本目にはさがり松

四本目には志賀の松、

五本目には五葉の松、

六つ昔は高砂や、尾上

の松や曾根の松、七本

目には姫小松、八本目

には浜の松、九つ小松を

植えならべ、十で豊国の

伊勢の松、この松は最

上の松にて、情有間の

松が枝の、くどけばなび

く相生の松、又いつく

の約束を、日を待つ時待つ

暮を松、連理の松に

契りを込め、福大国は

満歳な、目出たかりける

次第也。



石垣のある民家

井内地区は市内では中山間部に属し、総じて準急傾斜地帯であり、古来より屋敷（宅地）造成は石垣を巡らし平地ひらとなし、半切半盛とでも云うべきか、略図の如く造成されたと考えられる。

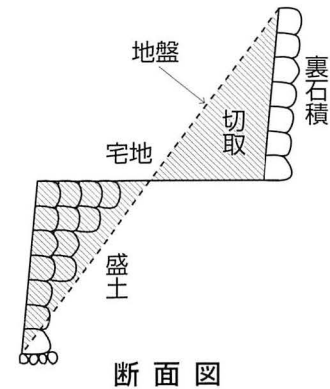
当大平地区は古屋敷跡も点々と残り、当地の古老の父親より聞いた話では、明治中期頃には二十四戸在住せしが、今は十戸となり、往時の繁栄振りが窺へる。

少し昔までは各所に炭焼がまがあり、その煙が長閑な山里のしかの処ろどころに立ち込めて、山村ならではの、忘れられない風物詩であった。世の移り変りにより、炭の需要が激減して、井内地区においても、一ヶ処のみとなり当地区のK氏宅の下傾面を利用して炭がまを築き、奥行約二米、巾二・五米、高さ一・六米の、本格的な昔に劣らない規模のものがある。今は主おもに竹を焼き、竹炭として多面的に利用されている。又雑木類も陰切り材や、道路の支障木などを集めて、年中近隣の人達も利用して重宝されている。

当地は前述の如く山里であり、井内櫛の発祥の地として、米作を凌ぐ換金作物であり、気候、風土にも恵まれ、先覚者北川徳次郎翁



K氏の道路下にある炭がま（火を止めているところ）（2007年7月）



の偉業を受継ぎ、地元栽培者の努力の結果として、将に適地適産と謂ふべきか、特に日持ちもよく、松山市場及び県外にも出荷され好評であり、天与の作目として、地域に多く栽培されている。

さて話しを石垣に戻すが、石垣は又田園風景の一つをなす柵田があり、当地の柵田風景は、校区の西谷小学校百周年記念誌の表紙となって居る井内の山里を彩る記念すべき事である。

今回尋ねた石垣は大平上ノ壇にあるK家の石積である。先々代時に地元産石、此の地方では黒石と云う安山岩を木馬に積み、牛に引かせて運んだと聞く。当時の道巾は狭く急坂な処もあり、石集めにも、大変な労力を要したと思う。

宅地は三百六十坪余、石積の長さ約六十六米、高い処は約七米、平均高六・五米、約四百平方米余りあり、積石だけでも二千個を超えると推

定される。

明治末期頃より工を起し、大正五年頃に完成したものであると聞く。

野面積であり、宅地下の林道上に聳える。石組の一つ一つを見ても素人技とは思えぬ積方であり、根入、控へも深く栗石も多く使われていると思われる。孕みもなく隅石になる部分も湾曲に積み宅地としての利便性を考慮した積方と思われる。



K氏の石垣（手前林道。根石は林道面より約2米下にあり）（2007年7月）

石積工の名手、大津市無形文化財、穴太衆十三代目当主で、昭和五十八年吉川英治文化賞を受彰された栗田万喜三氏（故人）のコメントとして、「石の声を聴け、それぞれの石がそこ、ここにすわりたいなど云っている」某新聞記事を想い出す。K氏の石積を見たとき、ふと頭に浮んだ。九十余年の風雪に耐え、凜として、狂い、孕みもなく、今後も井内の山里を見守って呉れるものと思う。

その近くの見晴らしの良い場所に「とうばんさん」がある。（川内町誌より）大平井内の大平にあつて、戒能氏の旗下の一将、大平新左衛門尉のお墓だと云われ、「おべつじ」と云つて、毎年盆彼岸に大平組の人達が「おはぎ」等を持って集まり、参詣、念佛する行事である。

蓋し、「とうばんさん」は塔婆様で、「おべつじ」は御別時念佛のことであろう。

大平組の由緒の一端が窺える。



大平地区高所にある「とうばんさん」



寅さん物語
(追想)

それはもう大分昔の話である。昭和の初めの頃のことを、思い出して書いてみよう。

井内の庄屋元と云う処で、県道の南側に、三間に二間位の棟割長屋の東の家に「寅さん」と云う気前の優しそうな、一人の爺さんが住んで居た。(子供心には爺さんと見えたが今にして思えば五十才前後であつたらう？正式な名字も名前も分らない、今は知った人も居ない。)

私が小学生三、四年生の頃のことだが、学校から帰る途中で、寅さんの家へ寄つて家の前に井手(水路のこと)が流れて居た。その井手に「うなぎ(鰻)」を飼う箱が浸けてあつた。

「寅さんうなぎ見せてや」「見てもかまんがにがさんようにせーよ」と云いながら、板戸の隙間から覗きながらにたにた笑つていた。

一尺に二尺高さが六寸位のうなぎ箱で横には小さな穴がいくつもあり、箱の上三分の一位が板で開くようになって居り残りの部分は竹で指が這入る位の間隔で釘で止めてあつた。箱が浮かないように重い石が置いてあつた。覗いて見ると箱が水をせき止めて、うなぎを飼ふには充分な広さがあり、薄黒光りのするうなぎが、一、三匹うねくね箱の縁を廻つていた。寅さんの得意顔が浮んだ。うなぎはアゴの処をプカプカして頭が大きく目は白黒く光つているように見えた。子供心に物珍らしく鮮烈に映つた。何回見ても見飽かなかつた。

寅さんは、夏は川漁、冬は山漁をして生計を立てていた。土地の一步もなく裸一貫で一人暮しとは云え、今時と違つて、生活保護、健康保険制度など全くなく、生活福祉面では雲泥の差があつた。

それが当り前のような世間の中を生き抜くことは並大抵の事ではなかつた。

普通の農家でも当時は麦飯(半麦飯と云つて麦五合米五合)、副食も質素なものであり、子供の学校での弁当なども麦が混り梅干に少々のオ

カズ、日の丸弁当と云われて居た時代に、寅さんは白飯（米の飯）にうなぎ、小魚の焼いたのを食べて居た。見ていると自然に口の中につばが出た。垂涎すいぜんと云うのだろうか。薄暗い家の中で十シヨク位の裸電球居間の片隅には、万年床と云った生活であった。食生活が一番であり、このような生活が出来るのも一つの手蔓てずるがあった。その頃造り酒屋をしていた主人が始終しじゆうに寅さんの釣った鰻を買って呉れて、その代金がわりに充分な白米を貰って居たのではなからうかと思われる。寅さんは酒屋の主人に、夏はうなぎ、冬は兎の肉等を買ってもらって居たようである。寅さんは酒屋の主人を旦那と云って居た。

「寅さん年齢は何才かな」と聞けば「酒屋の旦那と同年よ」「酒屋の旦那は何歳なんばいぞな」「わしと同年よ」と云って平然として居た。（ほんとに寅さん自分の令としを知ったのかな？）

そんなユーモアも持っていた。好漢愛すべきか。話しはうなぎ釣りに戻すが寅さんは三尺位の細い竹竿にうなぎ針にみみずなどを刺して、うなぎ籠をさげて、井内川の本流支流を廻り、うなぎの居そうなガマ（石の重り合った穴のこと）をよう知って居たと思う。そのガマは自然に上流の水を受けるような処で奥まった深いところであり、餌えが（川虫など）流れて来るような処に住んで居たようである。うなぎは夜行性であり昼間はガマの奥深くに潜り、夜になるとガマから這出して餌を漁とって泳いで居る。夜川よかわと云って当時のおせ（大人）になると松明たいまつなどを川面に照して、うなぎ切ると云って鎌で胴体を切って漁する方法もあったが、寅さんは釣一本であった。うなぎ釣名人と云われた。

川の何処のガマが良いかを常に覚えて居たのであろう。うなぎの習性として一つのガマには一匹が住み、そのうなぎを釣ると又別のうなぎが住み家としたようである。

寅さんは一つのガマで何匹ものうなぎを釣ったようである。

冬になると寅さんは落葉した雑木林に立入り兎の通り道にククリ（針金をワツカにして木の枝をしならして先の処に針金を巻付ける）を掛けて廻り、山の南斜面の平地には柴オスをかけ山鳥キジ等を狙う。又狸、テン等の獣道にはトラ鋏を仕掛ける。二、三日に一回はこれらの仕掛を見て廻る。獲物は袋に入れて背負う。又オスと云って板の二尺角位の川辺の平地を均して重石を板の上に置き片方を上げて天秤のようにして中にどじょうなどを刺した串を入れ、イタチが餌を引くと天秤が外れてオスの下敷きとなる仕掛を何ヶ所もした。

イタチは皮をむいで板に張り付け釘で止めて広げて、天日干にして保存して置くと皮買さんが来て可成りの高値で買って呉れたようである。その当時は雑木林、草地が多く、野山には野兎や山鳥、つぐみなど今は比べものにならない程生息していたようである。

寅さんの生活を支えるには充分であったことが想像される。鉄砲は使わず仕掛一本であり、天性的なカンが勝っていたようである。

メジロ、ヤマガラなども、おとりを使って生獲り、目白籠なども手製で造り一人楽しんで居た。

寅さんは手先が器用で、竹細工、ほうき造り、藁細工、草履、わらじ造りなどして売っていた。これらの製品は天下一品、秋祭りの獅子起しのわらじは寅さんの専門であり又よく似合ったものであった。

手先の器用な事は、農作業にも重宝された。特に早苗取は抜群であった。Tさんは大作であり（田を多く作る人のこと）寅さんも時々家に入りして居たが、田植時になると必ず寅さんを雇い苗取をまかせた。その当時一反苗約三百束取ると一人役と云われた。

寅さんは苗取り当日は朝早くから苗代田に這入り、腰掛を使わず中腰でサクサクと苗を取りバサバサと洗い、サツと水をきり脛で苗の元を揃へ束ねて前に進んで行く。この作業の繰返しであり熟練度が要求される。

田を植へる人を苗乙女と云ったが「寅さんの取った苗は植え易い」との評判であったとか。

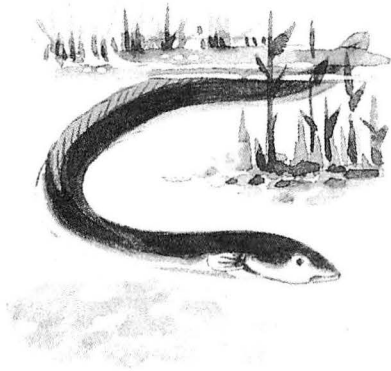
寅さんのことを書けば限りがないが、座敷などで請われると枕踊りと云うかくし芸を以っていたとの事である。Tさんの処へは正月は何時も招かれてこの芸を披露して居たとか、何処で芸を覚えたのか、昔の遊里の芸事の一つではなかったか、定かではないが唄も声に艶があり圧巻であり多芸な一面が窺えた。

出身について或人の曰くには漁師の出とも云われ、何時頃から井内に住んだか知る人も今はなく、戦後亡くなり、身近な人が引き取られたと聞く。

何はともあれ寅さんは井内の山里で心の向くまま自由奔放に生き抜いた逞しい生涯であった。

現在の高齢化社会の我々の生きかたになんらかの示唆を与えて居るように思えてならない。

(終)



井内むかし話

〔非売品〕

二〇〇七年十二月吉日発行

著者 菅野 壽明

発行所 井内老人クラブ

東温市井内一四二六番地

電話〇八九(九六六)三五七四

印刷 アマノ印刷有限会社

松山市東石井一丁目一〇一三〇

電話〇八九(九五六)二四四二